

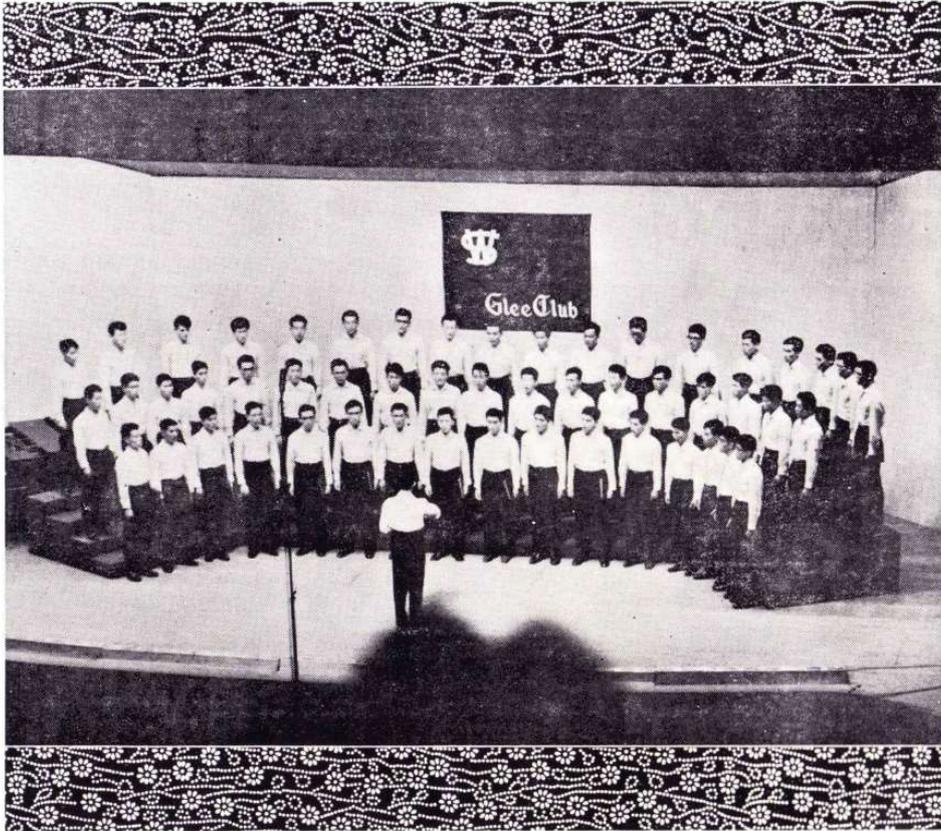
西南学院グリークラブ創立四十周年記念誌

四十年の歩み

昭和 35 年 12 月 30 日発行

②第二次世界大戦前

- ・これは 1960 (昭和 35) 年に西南学院グリークラブ創立 40 周年を記念して作られた記念誌を 2018 年、同創立 100 周年を前にデータ化したものである。
- ・今日においては不適切と思われる表現が用いられている個所もあるが、その資料性からそのまま掲載している。
- ・誤植と思われる語句については脚注にコメントをしている。
- ・二文字の繰り返しは繰り返し記号を用いてあるが、横書きにしたため、言葉に置き換えた。
- ・地名の柳川については「柳河」を用いられており、そのままとした。
- ・久留米の「留」は「ツ」の下に「田」という字を用いている例が多いが「留」に置き換えた。
- ・毛屋禎吉氏の「禎」は示す偏に「貞」であるが、該当文字がないため「禎」に置き換えた。



Oh Seinan!

'Neath the stately pines By the ocean blue,
Stands our college fine, To thee we'll be true, be true.
Oh Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Oh Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

And the dear old campus, with its friendly shade
Where sweet friends greet us, From our minds won't fade, won't fade.
Oh Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Oh Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

Too soon we leave thy care, And part from friends so dear,
But all our fame we'll share With our Alma Mater.
Oh Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Oh Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

A Graves

四十年の歩み

グリークラブの創立
中井義雄とオーケストラ
西南四号“音楽部便り”
演奏旅行記
ストリングオーケストラの全盛
西南学院春季大音楽会
回顧録 “あのころのこと” 井上精三
回顧録 “グリーのはじめごろ” 河野博範
再びカオスの状態に
「地固まる」そして演奏会（昭和二年）
学友会報告—グリークラブ
金のことなど
独り立ち（昭和三年）
第五回久留米演奏会の記
創立十周年を迎えたグリー（昭和四年）
沈滞状態続く（昭和五年）
伊藤武雄氏のデビュー演奏会（昭和六年）
福岡最初の混声合唱団誕生（昭和七年）
回顧録 船越義雄
希望の島 徳永麟之助
復活第一回定期演奏会開かれる（昭和九年）
第二期基礎時代Ⅰ（昭和十年）
基礎時代Ⅱ（昭和十一年）
Seinan News
停滞状態（昭和十二年）
昭和十三年
充実時代Ⅰ（昭和十四年）
戦友に贈る
ライラックの創立
自由の歌 鶴原太郎
ふるさと 松本省一
充実時代Ⅱ（昭和十五年）
戦時下の活躍（昭和十六年）
笹森教授の功績（昭和十七年）
戦前最後の演奏会…そして解散（昭和十八年以降）
回顧録 内海洋一

親愛なるH君へ

Lord I want to be a christian

いくさびと

梅北正彦

内海洋一

井上良助

グリークラブの創立



創立尽力者ミス・フルジウム

西南学院創立に遅れること三年、大正八年ミス・フルジウム女史の本校への着任の後、女史のもとに歌のすきな中学部（当時は中学部のみ）のイガグリ頭が集まり、讃美歌等チャペルサーヴィスを目的として最初は始まった。当時のメンバーは河野博範（現西南大教授）、伊藤俊雄（現西南大教授）、井上精一二（現NHK福岡放送局）の三氏が中心で、他に伊勢田、牟田、田沢、平野、野呂、寺田…等がいた。

中心メンバーはそれぞれ箕子町の教会、あるいはメソジスト教会のクワイヤーとして唄っていたのであるが、関西学院グリークラブのクワルテットの来校によって刺激され、またフルジウム女史のチャペルサーヴィスでの美声に感激し、女史に技術指導を仰いだのであった。彼女は当時西南学院と同系（南部バプテストのミッション、ネットワーク）の舞鶴幼稚園に在籍して学院と密接な関係があったことから、学院の音楽活動の助力を依頼され、引き受けたので、音楽が彼女の本業ではなかったが、アメリカではバッチェラー・オブ・アートの称号をとり、また彼女のソプラノの美声はチャペルでも評判であった。

彼女がグリーの世話をする以前に何らかの形でコーラスグループが出来てはいたのであるが、クラブ活動として本格的に歌い始めたのは彼女の来任と共に始まったのであるし、彼女なかりせば現在のグリークラブは存在しなかったかも知れないし、その成長に大いに力があつたのだから、所謂クラブとしての真の形成をなした意味で創立者と云ってもよいのであるが、フルジウム女史にも増して創立者として水町義男（現名誉院長）をあげなければならない。氏はグリークラブの初代部長として、もた数少ないメンバーの一人として、またグリークラブの名付け親として特筆しなければならない。

水町氏の感受性の豊かさは、校歌、卒業式行進曲等の作詩に表われている。

水町氏は唄うことの好きな感受性豊かな青年だった。彼がその多感な青年時代を西南学院に過ごしたことが、そのままグリークラブの発生に結びつくのである。彼が学院中学部に赴任して以来、チャペルで歌う讃美歌に彼は唄うことの楽しさを見出し、爾来そのような少年達のリーダー格でコーラスグループを作り、当時学院の宣教師ボールデン氏の後援でチャペルクワイヤーとしての役割を果たしていた。こうして暫く技術的な指導をミス・フルジウムに受けるようになったのだ。

このようにして出来たコーラスグループにグリークラブの名称を与えたのも水町氏であれば彼を創立者とすることに他言はないだろう。

フルジウム女史と水町氏の協力によりクラブ活動を始めたのがグリークラブという男声合唱団の最初の姿であった。

当時は第一次世界大戦の後で、大正九年財界恐慌によって日本の産業界は「戦争景気」を過去に葬り深刻な不況時代に入っていた。また民衆は生活難で苦しみ「舟頭小唄」等の哀調をおびた歌がはやっていた。

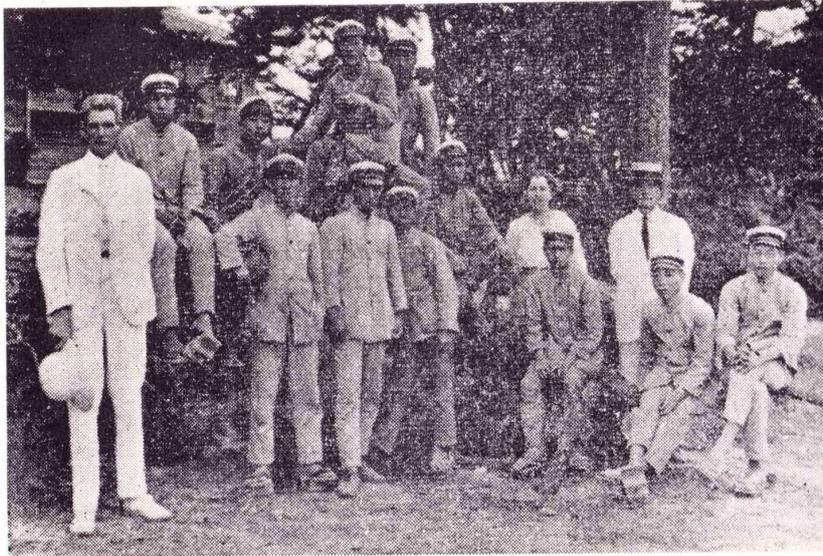
かかる時代に於いてイガグリ頭の一団は地行の海岸にあった女史の住いに集まり、「オールド・ブラッ



創立尽力者 水町義雄氏

クージョー」、「スワニー川」等の米国民謡、讃美歌等、横文字物を数多く勉強した。

練習場は学院構内の教会堂や教室で有志だけで二時間程度やり、楽譜等は現在と異って男声ものは入手が困難であったが、宣教師によってもたらされた。“One hundred and best song”の中から主にやっていた。



ボールデン先生をかこんで（グリー最初のメンバー）

本格的なステージ活動はチャペルサーヴィスくらいで、グリークラブ単独の定期演奏会をもつまでにはまだメンバーその他で至っていなかったが、中井義雄氏を講師として迎え、高等学部の設立と共に西南学院グリークラブの名声を西日本に広めるのである。

中井義雄とオーケストラ

大正十一年、高等学部の設立と共にグリークラブの活動は中学部の主力メンバーがそのまま高等学部に進んだので、グリークラブも高等学部に昇格した。中学部で唄っていた連中の中から井上精三、伊藤俊男、伊藤武雄等を中心にして合唱だけでは物足りない連中が器楽部を音楽部の中に作り上げた。

ストリング・オーケストラの設立により、グリーの活動は合唱からオーケストラへとその活動も変わった。大正八年、大阪から来福して福岡楽壇で活躍していたバイオリニスト中井義雄氏を井上精三氏が西南へひっぱりつけてきてその指導を仰ぎ、オーケストラは十一年の春には第一回の演奏会を開催するまでに発展した。中井義雄氏のことに関して「西日本洋楽物語」から抜萃してみよう。

中井義雄に関して

この名前をなつかしく思いおこす人が西日本各地にかなりいるはずだ。大正八年はじめてふらりと福岡にあらわれてから、昭和二年の春、福岡で病死するまでの九年間あまりの短い間だったが、はなやかなバイオリニスト、音楽教師としての年月だった。

そしてこの短い間に彼はずいぶん西日本の音楽に尽くした。だから当時は西日本各地に名の知れた男だった。いまでも、古い音楽ファンの間には『中井がもっと長く生きていたらな…』とよくささやかれる。



中井義雄氏

彼は大阪の楽器店のムスコ。楽器店とはいってもバイオリンの弓をつくるのが専門だった。だから子供のころからバイオリンにはなじんでいた。東洋音楽学校を中退。たまたま山口県小郡の音楽グループの指導（大正中ごろにはもうこんな地方にもそのようなグループが生まれ、講師を招くまでになっていた）に来ていた。当時、福岡師範の音楽教師は原田彦四郎（山口県小郡出身）だったが、帰郷した原田に中井は認められ『福岡に来ないか…』ということになったものらしい。こうして大正八年、中井は福岡にやって来た。

やがて中井は西南学院、九州高女の音楽教師として勤務、それぞれの合唱団を育てもし、またみずからのバイオリン演奏会をよく福岡市記念館で開いた。九州各地にもよく演奏にでかけた。美しい音色、豊かな音量でサラサーテの『チゴイネルワイゼン』をお得意の仰曲としてよくひいた。『中井のチゴイネルワチゼンを聞いていらい、あの曲が大好きになった……』という人もいる。なかなかイキな好男子でもあったし、女性にもよくもてた。作曲もよくやった。東中洲の宮崎楽器店内のフタバ楽譜から楽譜もかなり出版している。

大正十四年、はじめて福岡市で聞かれた西日本女学校生徒連合記念音楽会で、九州高女合唱団は中井の指揮で歌ったが、この伴奏は西南学院オーケストラだった。中井が両方の教師を重ねていたからできたことだが、とにかく、これにはみんな驚いた。いまでこそオーケストラ伴奏のコーラスはめずらしくもないが、当時の西日本では断然新しく、光彩をはなつた。このため、他の学校から文句がついた。そして翌年からオーケストラの伴奏はダメという規則になったというエピソードがある。中井はそんな男だった。——現文のまま——

中井氏の本学への着任は創立当時のグリークラブへ新風を吹きこんだのであるが、グリーの活動も大正十一年から昭和三年まではオーケストラが主でコーラスの方はわずかにダブル、クワルテットくらいのものであった。

関東大震災の後、楽聖クライスラーの来福を始めとしてクロイツァ等の外来音楽家の来福が相つぎ、福岡の音楽ファンも洋楽の本格的演奏に初めて接したのであるが、この影響は各地に於ける素人楽団の発展に多大な貢献をなし、グリークラブにもその影響大なるものがある。

大正十一年秋の第一回の演奏会は福岡に於いて画期的な催しであり、その反響は大きく大成功であった。この第一回の演奏会の成功により、各地からの招聘が相次ぎ、演奏旅行等の素地をもついたのである。当時の活動を「西南四号」の中からひろってみよう。

“西南四号”音楽部便り

井上 精三 記

西南学院グリー倶楽部が此の一年目間に非常の発達をとげました事は吾々部員の喜びとし誇りとする所であります。で、その自慢の数々を並べてみましょう。

「先ず此の学年の始めに学校当局の許可を得て声楽部の外に器楽部を設けた事で必要な数個の楽器を購入し地方に於ては前例の無いストリング・オーケストラを組織し十数名のメンバーを得る事が出来ました。而して此処に特記すべきは音楽部講師として中井義雄氏を聘し得た事です。かくして声楽部は

1 原文のまま：開かれ？

ミス・フルジュムの下に器楽部は中井氏指導の下に猛練習を積み数名の外人教師の応援と共に花々しく去る十月七日市記念館に於いて西南学院グリー倶楽部秋季大演奏会を開催しました。而もその演奏会は予想外の盛況を得、千余の聴衆及西南学院中等部、女子師範、九州女学校、福岡女学校、伴女学校その他の団体入場者のあったことは地方の音楽会として未曾有であります。此の盛況も皆学校当局及応援出演者の諸氏並に準備万端に御尽力下さいました各部諸君の御後援によるものと厚く感謝致して居ります。



ストリング・オーケストラ

左に決算の報告を、

収入額	金四百一円拾千	支出	金九拾六円七拾九銭
五円六十四銭	記念館払及電燈料	六円也	スミス氏謝礼
九円也	プログラム代	拾貳円也	印刷代
九円也	ピアノ運賃	拾五円也	ピアノ調律代(二回)
拾四円	ポスター印刷代		純益三百円拾銭也

九円也 下足人払及御礼金
六円五拾銭 ピアノ運送者中食代
拾四円六十五銭也 雑費

右の利益は音楽部長の許可を得器楽並に不足の楽器の購入に充て一層の音楽部の充実をはかりました。終りに大書す可きことは大分日田町に於いて演奏会を開き得た事であります。彼の地の比佐津倶楽部の招聘に応じ、水町高等学部長及中井氏の引率の下に器楽部員の九名が博多駅を出発したのは十一月二十二日の正午でした。そしてその夜公会堂で演奏致しました。会場のお綺麗なのと聴衆が中流以上の方許りでありましたので非常に気持の良い演奏会を開くことが。翌日は鄭重なる倶楽部の招待を受け又所々を見物してその夜愉快地に帰福致しました。紙上を以って比佐津倶楽部の様、及び斡旋の労をとって下さいました商科の小松、溝口両君に厚く感謝致します。

此の日田の演奏会に於て私共が感じました事は学校の宣伝が演奏会を開く事によって非常の効を奏すると言う事でした。市内に於いて西南学院の名を知らない人があろうとも日田町に於てはその名を知らない者は殆んど無いと言っても過言では無いと信じます。此の意味に於て学校宣伝の為に音楽部は是非今年中に九州演奏旅行を決定致し度いと存じます。而しこれも各部諸君の御後援に抛らねばなりません。で今後何分の御援助あらんことを祈って擱筆致します。——現文のまま——(井上氏は現NHK福岡放送局勤務)

以上にあるごとく下足代等、今日では想像も出来ない。会場の市記念館も現在はさびれているが当時の一流会場であった。

この頃から小倉の西南女学院との関係も出来、クリスマス音楽会等で今日も復活されている。演奏旅行の始りもこの年で、そのことを当時の旅行日記からひろってみよう。

演奏旅行記

五月十九日・晴のち雨

水町先生、中井先生をはじめ一行十八名、それぞれの楽器を携えながら六時二十三分発列車に乗るべく博多駅集合。寺田君は一人遅れて遂に一同に間に合わなかった。夜行につかれたらしい乗客は横柄にねこんでなかなか席を譲ろうとしなかった。

三つ四つの駅を過ぎ、どうやら席が空いたころはやがて下車駅に着いた。「小倉々々」と駅夫の呼ぶ声に一同はプラットフォームにはき出された。原先生のお迎えを受け一行は電車に乗り込む。初夏少々暑く流汗を覚ゆ。漸く山頂の西南女学院に到着し

た。ながめ美しい緑に萌ゆる野辺より吹きまくる微風は我々に心ゆくまでの涼味を与えた。かくて第一回目の演奏会も遅ればせにかけつけたIを加えて始まった。プログラムを抜萃し七、八曲を演奏した。バスが無くホールが反響しないので余り思わしくなかった。然し小さい妹達が心より喜んで呉れたので何より満足だ。かくて終り、昼食ども御馳走になる。しばらくの休憩に音楽練習をし、此処にて四時間余りの時を過し同じミッションの下にたてる懐しい西南女学院に別れをつげた……。

午後三時小倉発別府に向う四時間余の車中、退屈まぎれにコーラスの練習をしたり、トランプ、居眠り等する者もあった。

疑しかった天候も遂に雨となって着駅にてかなり困難した。山下先生、楽器店主（博多中小路ミツヤ楽器店一中井氏はここに下宿した一の主）の歓迎を受け自動車にて宿に着いた時はもう八時に近かった。名物温泉につかれを忘れ、おいしい晚餐を馳走になった。五、六人して湯上りのままに近き町を歩き、とあるカフェで愛嬌あるウェータレスに侍られサイダー腹を作って出た。Iは参っている様だった。余りサイダーを飲みすぎてではあるまいに……。それぞれ床に着いた時はもう大分遅かった。明日の演奏会が盛会ならん事を祈る。

二十日（日曜）・曇

どうもはっきりしない天候に弱ってしまった、未だ道はきたなく汚れていた。午前十時頃から富士紡績会社にて職工等の為にプログラムを抜萃して演奏した。曲について一々丁寧に解説をし面白く笑わせながら二時間余り費す。ホールも駄目であったがピアノの代りにオルガンを用いたので全く淋しかった。社内には朝鮮人も随分沢山居た様だった。川に三、四人の鮮婦が洗濯をしている様子を見ると丁度朝鮮の土地の様な感じがして如何にも長閑な呑気なものだった。

大分公会堂に行き、始まるまでの余暇を各新聞社後援に対する御礼訪問をして又昼寝したりして費した。会場整理にも手伝い漸く時刻も近づいた。ショボショボ五月雨は降る。最も適したホールに聴衆が静かであったのでかかって無い気持のよい会を催す事ができた。中井先生のエンゼルセレナーデトリオの時一同魂を奪われ恍惚としている様は丁度魅せられている様であった。ソルベージソングも此の上無かった…。だんだんプログラムは進む。四部合唱「皆様さらば」を最後に愈々会も終わった。此の時或る方によって作られた和歌を記念の為に記しておこう。

楽の音は静かに流れ初夏の

ボンボリの灯のゆらぐが如し

互に盛会を祝し合い会場を後に汚れた道を電車へと急いだ。十時、やがて別府の宿について湯に入って騒ぐ者もあった。もう相当に遅いが誰も寝ようとしな。色んな話に実が入って一時打つのも分らず二時過ぎによやく眠った位だ。

二十一日（月曜）・小雨

今日も亦いやな天気だ。午前某女学校で演奏する筈であったが時間の都合上、中止して十一時宿を出た。昨夜来の小降りに道は念入って汚れていた。

大分の道にホトホト愛想をつかして駅に着いた。一時五分発列車にて八幡に向った。五時過ぎ着……。

基督教青年会主催により寿座で開催した。此の時中井先生が急用にて帰福されたので代りに伊勢田君の指揮、又フルジュム先生、シェル先生方の御後援で大いに力を得九時半に会は終わった。入場者も会場一ぱいで大盛会であった。三日間の旅行演奏も漸く終り一同は此処にて解散した。或者は明晩門司にて催されるクライスラー氏ヴァイオリン独奏会に出席する為知るべを尋ねて泊り込んだ。面白い事もあったが又つらかった演奏会もかくて終わった。

十月六日（土曜）・晴のち雨

飯塚バプテスト教会婦人会主催に関東震災のため慈善的意味の下に十名余の部員は招待され、加勢の様な風で牛后一時博多駅を出発し四時着駅、小林宿屋に投宿した。

演奏会は前掲プログラムに左の様なものを加えた。

ドリゴのセレナーデ

声楽 リッツル、ブラウンチャーチ

希望の島

不幸にして音楽に対して聴衆の訓練が出来ていない様に思った。その筈だ。未だ音楽会は一回もしなかったそうなもの。色んな和楽と一緒に時間も随分過ぎた。而し会場設立以来初めての大量入場者で下駄札が不足して困ったそう。十一時閉会した。宿にて主催者達の訪問を受けしばらくは雑談に過ぎた。人が寝て後KとMは宿の面白い方と三人で遅く迄夢中でトランプを遊んだ。柱時計は二時を報じた。空は真暗で星一つない。秋もよい。

しかし、コーラスの活動は先にも述べたごとく、ダブル、クワルテットくらいの人数でストリング主体のグリークラブであったということは否めない事実であり、グリークラブの由来等からオーケストラとグリークラブの結びつきは今日では奇異な感じをも受けるのである。

ストリング・オーケストラの全盛

西日本で占めるオーケストラの位置は各方面から注目を浴び、大正十三年三月七日、市記念館で開催された「西南学院春季大音楽会…西南学院高等部音楽部」は地元紙福日、九州日報でも紹介されている。以下部報で十三年を回顧してみよう。

“部 報”

Y・M生

回顧する 1 ヶ年はこと多い光に充ちたものであったことを思う。批判や情誼やまた一方嫉視の多い音楽界に於て堂々として今日の地位を得るに至ったのは中井義雄氏の苦心と部員一同の熱心に外ならない。

日田町公会堂、小倉西南女学院、別府・大分市公会堂、飯塚町飯塚座、中津町常春座、扇城女学校、八幡市寿館、若松市公会堂、久留米市丸喜演芸場。

等々を折にふれ軽々と旅行演奏をなした我部はここに来る。

五月十七日、福岡市記念館に於いて花々しい大演奏会を開いた。

【プログラム】

(第一部)

一、ストリングス・オーケストラ バクダットの酋長…ボアイルデュー作

二、男声四重唱 スワニーリバー稽威…フォスター作

三、絃楽四重奏 ドリンク・ツ・ミ・オンリー

ウイズ・ザイ・アイズ・エンゼン・ガブリエル…ウラツアリー・カ

ルテット編

四、上低音独唱 伊藤武雄君

夕の星（歌劇タンホイザーの中）…ワグネル作

五、ストリングス・オーケストラ

小夜楽エスパニョール…ビゼー作

東洋風舞曲…ラボミヤウスキイ作

(第二部)

一、ヴァイオリン、ピアノ合奏 中井義雄氏 越尾氏

二、ソプラノ独唱 フルジュム氏

三、男声四重唱 私聞くあの美しき声を露營の夢…レージ作

四、ストリング・オーケストラ A ソルーベージの唄…ドリゴ作

B 小夜楽…ドリゴ作

C ハンガリアン舞曲第五番…ブラームス作

楽界からも世間からも大いに認めらる。我が部は来るべき期を待って九州一周は勿論、関西関東への旅行の期を待っている。が、我が部員にして来春五名の卒業者があつた。部の後継のために大いに痛棒だ。これらの後継を得るために当局は一方ならず心配している。部員の方にはなお一層の努力を願いたいと同時に新しく器樂を練習したい方があれば何れの樂器をも貸与し、御練習に力添え致したいと思う。希望の方は各組の音楽部員まで申し出られたい。（雑記）

多年我が音楽部を熱心に指導して下されたフルジュム先生は六月四日午後五時五十七分の汽車で帰米につかれた。我が部より餞別として博多人形を進呈した。なお当日は多数の部員によって見送る。来る七月五日、門司救世軍主催にて彼地に旅行演奏の招聘あり、出来るだけ応じたいと思っている。当市の音楽会にて学生会の方の努力に対し御礼を申し上げます。

西南学院春季大音楽会

福岡西南学院高等学部音楽部は七日午後七時より福岡市記念館に於いて春季大音楽会を催す由。曲目は天国と地獄、待春賦、椿姫、さすらい人等の大作でコンダクター中井義雄氏の指揮の下に猛練習を続けている。(福日)

西南学院 春季大音楽会

三月七日(土) 午後七時

於 市記念館

主催 西南学院高等部音楽部

後援 九州日报社

我が西南学院高等学部第一回卒業生を送るに当り、四年の間多くの犠牲を払って我が音楽部をして今日あらしめた諸兄に対する送別の意味で大音楽会を催したいと思ひます。拙い我等のオーケストラは九大フィルハーモニー²会の非常なる同情を得、またコンダクター中井義雄氏の熱烈な指揮の下に涙ぐましい猛練習を続けて参りました。今春は特に大橋氏外三名の管楽器吹奏家の応援を得て盛大な演奏会を持ちたいと思ひます。心地よい春の夕に若い西南健児の熱誠こめての演奏に耳を傾けられることを切望致します。

【プログラム】

一、オーケストラ	序曲天国と地獄	オッフエンバッハ作
二、絃楽四重奏	ストリング・クワルテット	ハイドン作
三、独 唱	さすらい人 特春賦	シューベルト作
四、オーケストラ	ピックダーメ	カーラール作
五、オーケストラ	椿姫	ヴェルディ作
六、ヴァイオリン独奏	中井義雄氏	
	ベルシューズ	イルジンスキー作
七、ピアノ独奏	未定	尾越 隆作
八、オーケストラ	カルメン	ビゼー作

(編註 大正十三年七月十五日発行“西南第七号”より)

大正十四年五月——まだラジオは東京でNHKが仮放送をはじめたばかりのころだった。この日、九州でははじめてのラジオの放送、受信が行われた。

この放送の時、中井義雄氏がバイオリンを独奏したし、また井上精三氏のピアノ伴奏でお得意の「チゴイネルワイゼン」をひいたのも特筆しなければならない。

十四年十月、皇孫御誕生奉祝音楽会が市内各中学、高等女学校合同にて、九州日報主催にて行なわれたとき特別出演の依頼に応じて二日間共オーケストラニ曲外九州女学校コーラス伴奏をなす。

他に下関バプテスト教会の慈善音楽会に招聘され、下関梅光女学院講堂にて演奏す。主カメンバーがぬけたといっても中井氏の指導で西日本でその地位を確保してきたのであるが、大正十年からの活動はストリングが主でコーラスは先にも述べたごとくオーケストラをあくまでも主体とした合同で演奏会を催してきたのであるが、各メンバーは楽器もこなし、歌も唄いであった。中でも特に目立っていたのは伊藤武雄氏のバリトン独唱で、氏の音楽に対する情熱と感の良さはすでにこの時から養われてきたのである。

² 原文のまま

あのころ

井上 精三

事件と、記録の成立した年代とのひらきが少なければ少ないほど、史料としてその価値は高いものだろう。古事記、日本書紀³が四世紀もたってから書かれているだけに、学者が信用しないのはあたりまえ。

こんなことを考えるのは、このごろ古いことをたずねられたり、自分自身調べて見て、つくづく同時代史料の尊いことを痛感するからだ。

先般もわずか四十年前のことで失敗した。新聞社からたずねられて、西南学院グリークラブの第一回公開演奏会を大正十四年に開催したと語り、そのまま西日本音楽史として掲載されたが、最近、現在のグリークラブの檀浦君が学校図書館から当時の記録を発見して、見せてくれた。たしかに自分が書いたものであり、それには大正十三年とある。記憶のたよりなさをあきれるとともに、新聞社にすまぬことをしたと思っている。

その記録は別欄で掲載されると思うので詳細はそれにゆずるが、ここでいいたいことは、当時の演奏会で三百円の利益をあげていることである。たった三百円とわらってらっては困る。物価指数を千倍としても三十万円なのだ。青くさい学生の身でたった一回の演奏会に三十万円の利益をあげるなんておどろきものだ。

洋楽熱勃興の機運にうまくのったのと、クラブ員一同の熱意でこんな成績をあげたものだが、その利益でダブルバスやビオラなどの楽器代を払って、器楽部を充実したのはうれしかった。

それにしてもよい時代であった。ジグザグ行進の必要もなく、芽ばえてきた洋楽にうき身をやつすことができたのだから、幸福な学生生活だったといえる。

作家の原田種夫君と、尺八とヴァイオリンを兼ねておしえる先生のところに通ったのは西南の中学生時代。高等部に入って福岡市で最初の西洋料理店「共進亭」の息子、寺田敏郎君とヴァイオリンの二重奏などで楽しんだもの。ヴァイオリンを抱えている男の学生なんて珍しいときである。硬派の学生からならまれもしたが、音楽の魅力にとりつかれて、熱意はますます上昇するばかりであった。

そのころはやったゴンドラの歌（命短かし恋せよ乙女）、流浪の民（流れ流れて落ちゆく先は）、船頭小唄（おれは河原の枯れすすき）などの感傷的流行歌はニキビ学生にも愛唱された。これに刺戟されて、がらにもなく自分で作詞、作曲し、木版ずり表紙の小型楽譜を市内の楽器店から売り出したのが高等部一年のころ。いまから考えると冷汗ものだが、曲名がなんと「なみだ」。たしか千部印刷してまたたく間に売り切れてしまったが、発売者から作詞、作曲料も著作権料ももらった記憶がない。もっとも先方は学生の分際なのを出してやったのだから、ありがたく思えと考えていたのであろうし、こちらだって出版されたそのことが嬉しさで一ぱいである。とくに女学生の団が、そのうたを歌ってくれているのを聞いたときのありがたさ。正直なところ手を合わせたいほどだったから世話はない。

西南の学生は音楽にめぐまれている。毎朝チャペルでうたう讚美歌も、少しでも音楽に興味を感じるものは、楽譜どおり四重唱でうたいたいくなるもの。聖書研究会のあとなど、よく四重唱をして、ハーモニーの美しさに酔ったものである。

³ 原文のまま：日本書紀？

ミス・フルジュムさんが学院に来られてグリークラブが生まれた。名付け親は水町義夫先生であった。讃美歌をはじめ、アメリカのフォークソングなど毎週練習した。練習場は学院の講堂。たまには地行三番町のフルジュムさんのお住居で練習したこともあった。

メンバーは二十人足らずであったろうか。最初はもっと少なかったかも知れん。すばらしいバスの持ち主、河野博範とバリトンの伊藤武雄ののどが印象にのこっている。こちらはテノールに廻わされたが、青筋立てても思う音が出ず、いつも調子はずして、フルジュムさんににらまれていた。しかし美人でやさしいにらみだから、おそろしいどころかかえって嬉しいぐらい。なごやかな、そして楽しい練習であった。

うたの仲間はずれぞれ楽器の練習もやっていた。うたっているばかりでは、どうももの足りなくなつて西南絃楽四重奏団をつくった。第一ヴァイオリンが自分、第二ヴァイオリン寺田敏郎、ヴィオラ牟田義信、チェロ伊勢田崇のメンバーである。この四人が一番親しい音楽仲間であった。卒業後も交際をつづけたが、もっとも弱かった自分だけが生きのびて、あと三人は亡くなってしまった。淋しいことである。

絃楽四重奏団は練習をつづけた。少し上達してくると、他人に聞いてもらいたくなるもの、しかしクワルテットだけではさびしい。いっそのことオーケストラを組織しようじやないかということになって同志を集めた。

バイオリンやチェロぐらいまでは自分の楽器持参で参加してくれたが、ダブル・バスやビオラなど自費で買う人はいない。それかといってこうした楽器がなくてはオーケストラにはならない。いまから考えると乱暴きわまる計画だったが、あとはなんとかなるだろうと、ともかくダブル・バスやビオラなどを買いこんだ。秋に音楽会をひらいて、その収入で支払うという約束である。楽器店もよく信用してくれたものである。

こうして合唱をしていた大部分のものが、同時にオーケストラの練習をはじめた。自然グリークラブに合唱部と器楽部ができた。しかしほとんど全部のものが両部を兼ねたのである。

みんな一生懸命にオーケストラの練習をした。しかし何分小人数のオーケストラである。ひとりでも練習を欠席されるとみじめなものであった。サボル者もある。そのたびごとに頭をさげて出てもらうなど人知れず苦勞をした。もうやめようかと思ったことも数回あった。でも借金あればそうもならない。苦しい練習をつづけた。指揮には中井義雄氏に来てもらって、ともかく記念館でグリークラブ第一回の演奏会をひらいたのである。予想外の好成績。借款を完全に払ってやっと晴々しい気持ちになった。

それから頼まれるなりにあちこちに演奏旅行に出かけた。合唱と絃楽合奏である。どこの舞台でも元氣いっぱい。若人の血をたぎらして歌い、演奏するので、演奏技術はともかく評判はよかった。

演奏地を汽車ではなれる時がふるっている。メンバー一同、列車の窓から首を出して見送りに来てくれた主催者の人々にお礼をのべたり、挨拶したり、なかにはいつの間に親しくなったのだろう、若い女性と別れを惜しむかのように話しこんでいるものもいる。汽笛一声動き出すと、一同あの「故郷をはなれる歌」をうたい出すのである。しかも最後のくりかえし「さらばふるさと」の「ふるさと」をその土地の名にすりかえて、たとえば「さらば大分、さらば大分、大分さらば」と手をふり、ハンカチをふってはなれて行くのである。うまい演出である。見送りに来た人にも印象ぶかいものであったろう。当時のメンバーの誰でもが、いつまでも忘れ得ないなつかしい情景であった。

演奏旅行にはかならず学院当局の許可をうけて出かけたのだが、どういうわけだったかいま思い出せ

ないが、たった一回だけ無断で出かけた時がある。帰って来ると果して上級生だった自分がドージャー先生から大眼玉をくった。温厚そのものの先生があんなにおこられたことは、あとにも先にも見たことがない。なんとしてもこちらが悪い。ただコウベをさげて先生の怒りが頭上を通り抜けるのを待つばかり。ねばってグリークラブの解散だけは許してもらった。

こんなことになるのも、少し調子に乗り過ぎたためであろう。以後慎重にならざるを得なかった。

グリークラブの財政が楽になると管楽器もそなえてフルオーケストラを組織してはとの説も出てきた。しかしこれには反対した。管楽器の演奏にはかなりの技術を必要とするものである。やっと上達したころには卒業してしまう。しかも在校生が少ない時である。フルオーケストラなんて、楽団の運営を知らぬひとの主張である。絃楽合奏だけでもかなりの困難がともなうものだ。自分たちのようなはねっかえりの音楽狂がいつも居るのなら、まあなんとか維持もできようが、そうでないと、ながつづきするものではない。果して最初のメンバーが卒業してしまったあとは、次第にさびれ、数年にして器楽部はなくなったと聞いた。当然なことであろう。

しかしグリークラブの合唱は今も健在、四十年の歴史を誇っているという。受けつぐメンバーの努力もさることながら、なんとしてもすばらしいことであり、めでたい。書きたいことは、まだいくらでもありそうである。グリークラブについてほかの方も書くと聞いた。内容が重複してはつまらない。このへんで筆をおくことにする。

(筆者は大正十四年旧制高等学部商科卒)

グリーのはじめごろ

河野 博範

ある朝のチャペルで、今日は関西学院の神学校の方々が来て下さって、お話と歌をやって下さるといふ。お話はたしか、河上丈太郎先生で「サービス精神」という題であった。内容はすっかり忘れ去ったが、あのキンキン声で、手を上下に大ぶりされて

「サービスの精神、サービスの精神」と叱咤された様子は今も眼底に残っている。私共の中学四年（大正八年）頃であったろうか。話がすむと四名の背の高い学生がベビーオルガンのうしろに立った。今の柔道々場が当時のチャペルで東の窓からよく朝陽がさしこんだものだ。その頃のチャペルのオルガンはミセス・ボールデンがひいて下さった。とても身うごきのはげしい賑やかなもので、生徒らは先生の体を横に思いきってふられての伴奏を何より面白がった。ベビーオルガンだから、先生の大きな体だけでさえ横にはみ出るのに、その大きなジェスチャーだ。今にベビーオルガンがペシャンコになりはすまいかとハラハラしたくらいであった。

ところが、その朝のひき方はまるで反対。静けさそのもの。しかも、立ってひいている。と思ったのが、私が男性の四重唱を聞いた最初であった。実にすばらしいハーモニーであった。その中の一人がのちの譜美歌作詞作曲で有名な由木康牧師であった。

そういったのが一つの刺戟になり、更に教会の青年会などで合唱をやったり、特にミセス・ドージャーからは、「エスよこの身をゆかせ給え」というベースを教わった。これが私がベースをとった最初であ

った。それから有志のものが集まって合唱をやろうということになった。その頃のメンバーはというと、伊勢田崇、山田久、田沢耕三、織久正雄、伊藤俊男と私といったところで、主として教会関係が中心になった。名前は誰がつけたか不明であったが、伊勢田かボールデン先生であったろうか。昔の中学部の東や西の校舎で週何回か定期的にやるようになった。最初の指導者は鶴原太郎君のお父さんで、キレイなテナーであった。時には自宅にも招いて指導して下さった。最初歌ったのは『希望の島』で、わりとハーモニーがいいので一同大いに悦に入っただけだ。その次のが、**Jack and Jill went up to the hill**…といった英語のだった。

どうもいまふり返って見ると、そこらあたりから高等部になって、愈々グリークラブというものになっていったわけだが、それがどのような過程で発達して行ったのかがぼけてしまっている。

中学部では先に後輩に藤井泰一郎（一寸調子ははずれであったが）、野田明、佐田某、伊藤武雄と多士才々。それに井上精三、寺田敏郎、野呂光江、牟田義信などがヴァイオリンをはじめ大熱をあげ出した。そのために寺田と野呂は一年落第した筈である。

またその頃、どんな発声法をしたかという、ミス・フルジュムがいろいろ指導して下さって、横隔膜を強くせんといかんというので、本を腹に積んで呼吸してみたり、その他いろいろとやってみた。私はコンコーネを買って来てやり出した。とにかく大きな声を出さずればよいと思って、学校から帰ると当時北港町にいたが、海に向ってのどが破れるくらいやったものだ。ところが何年であったか、上野の音楽学校を三浦環女史と同期という宗教音楽の大家、児玉先生が講習会に来られ、一人一人声のテストをして下さった。見込みがあれば私は声楽家になろうと思っていたので、勇んで先生の前に出ると、あんたはだだっぴろいところで練習したなあ。あんたの声はあと寿命がない。森の中か岩かげかでやればよかった、といわれたのには悲観してしまった。そうこうしているうちに伊藤武雄の声がふるい出した。ヤヤヤ……やりおるばい、おいどんがつあ一向にふるわんばい、というようなことになった。

そのような過程を通して、とにかく、いつの間にかストリングとヴォーカルとが一つになって音楽演奏会や演奏旅行がはじまった。演奏会は市記念館であった。ミス・フルジュムのソルヴェージュソングは当時の人々をうならせた。いま思ってもあんなきれいな声はその後聞いたことがない程すばらしかった。

ミス・フルジュムといえば、私は先生とけんかしたことがある。それは、こんどの演奏会の練習歌曲が殆んど讃美歌だったからだ。足なえにおどり立ち、めしいいは見え…といったような。それで私は、讃美歌は人にきかせるものではない。神を賛美するものだ。それを公開して人にきかせるとは何事かといって練習をやめた。先生は私がテニスをやっている所まで来て、出てくれ、といわれたが頑としてうけなかった。先生はジーッと目から涙をながして私を見つめておられた。そんな私を今は思い出して、昔からこの私は悪い奴だと思ってみる。

第一回演奏旅行があったのは、私が神学科本科一年の時である。だから一九二三年の秋だったろう。私はギリシャ語を習いたてで、とてもこわい先生についていた。で、行けないと思っていると、当時の神学科長のボールデン博士が、行ってらっしゃいと公認して下さい。これはとてもうれしかった。あちこちと九州半周した。大分は公会堂であった。最も印象的であったのは、八幡のルーテル教会主催であった。その時のコンダクター、中井氏が急に差支えたので伊勢田が棒をふるようになった。彼はその頃、信仰がぐれて、性格もいくらかひねくれて来て、私共を、特に神学生の私をいろいろとひやかしていた。親友がそんな態度に出てくるのが無性に淋しかった。ところが、彼が指揮棒をとるといいう時、私を楽屋裏に呼んで、『おい河野、お前ね、ここでおれのために祈ってくれ。立派に役わりをはたせるよう

祈ってくれ。だのむ。』と私の手をとって固くにぎりしめたのであった。私は感激してしまった。そしてその夜は、一人楽屋で一心に神に祈りを捧げたのだった。

それがすむと皆は、次の日門司に来て福岡には来ないクライスラーを聞きに行った。私はギリシャ語があるので、そしてあのギリシャ語の先生が、学生が勉強してこんと実にはいやな顔をされるのを見るのがいやで、クライスラーを捨ててギリシャ語をとったことも忘れられない。ギリシャ語が独逸と比して私にとってより親しい感を持たせるのは、こうして打ちこんだことがあるからであろう。

昔と今と比すると、量において質において比較にならぬ程今のグリーの上達はすばらしく、その力倆も全国的に高まって来ている。

しかし、ここでオールドボーイとしていわせてもらえるなら、何だか今は技巧がかって、せいっぱい、力っぱい歌を歌うといった、生命の躍動が感ぜられないが、これは私の偏見かどうか。

第二、今の水準を抜くには、やはり金と時間をかけて、本格的指導者を招いて勉強することではあるまいか。伊藤武雄など、なかなか得がたいその道の指導者である。何とか話をつけてみてはどうか。

来年は四十一周年、そして西南開学五十周年もすぐ来る。古いところ、新しいところ、古いも若きもが一つになって、うんと歌い、歌いまくったらどんなものだろう。昨年の四十周年の公開演奏など、その企画において、実績(?)においてすばらしいものがあったと思う。若いところは若いところで、長君とか毛屋君とか、来年くらい伊藤武雄その他光輩と交えて一大音楽会を福岡の地で開いてはどうか、など思っています。(筆者は大正十五年旧制高等学部神学科卒・昭和六年同商科卒)

再びカオスの状態に

歌声で始まったグリークラブがこうして楽器も扱うようになり、四年後、大正十五年頃まではストリング・オーケストラが音楽部の表看板になってしまっていた。しかしながら同年春、牟田、寺田、井上の三氏或いは伊勢田氏の如き優秀プレイヤーが卒業してしまっ以来、絃の音も細々と、この表看板もいよいよ色あせようとしていた。そんな時、高等部へ中学部から船越義雄、菊池武正氏等が昇進して来た。彼等は優秀な光輩の輩出を惜しかと共にその伝統の継承と発展とを誓ったのだった。だが尾崎主一、柴田九万彦、伊藤武雄氏等を最上級生に、藤井泰一郎、岡良造氏或いは卒業後直ちに神学科に再度入学した河野博範氏と優秀な先輩、未成の輩を擁しつつも纏ることもなく期待を将来に継ぎながら離散の状態に追いつめられた。このようにして、演奏活動も練習も組織立つものは見られなくなっていったが、その実体が失われたわけでは決してない。

当時は寄宿舎は大名町にあり寄宿生は毎日曜一緒に礼拝を守る習慣があったのだが、その中に伊藤武雄、船越義雄氏等数名はチャペルが終わった後そのままベビーオルガンを囲み、簀子町の教会であった時は、クワイヤーに加わって唱い、それがすむと賛美歌等のコーラスを自分達自身で楽しんだのだった。この小グループが全くグリークラブの底流の形だった。彼等はまた当時福岡のYMCA主事をしていた内海孝夫氏宅に度々レコードを聴きに通いもした。内海主事は同志社のグリークラブに在籍したこともあり、福岡に赴任して来てからも唱う若者達をよく可愛いかってくれ、やがて為されるグリークラブ再興に当たっても少なからぬ助勢を賜った。

「地、固まる」そして演奏会

そうこうするうちに昭和二年の春は訪ずれ、伊藤武雄氏は卒業し上野音楽学校へと去って行くことになり、氏と親交深かった船越氏は、氏からクラブの充実と再興についての世話を頼まれ、この年、中井義雄氏を失って歌声も絃の音も断えた音楽部をおこしにかかった。しかし、この仕事は大変な難事業だったのだ。器楽部も自然に立ち消えた状態にあって、学校から音楽部に割り当てられる予算も暫時停止されており、社会の機運は軍国調の色が濃く、軍事教練が配属将校の指揮下に行われ、表面的には頭わかれなかったが、音楽をやることは軟弱なことというような気風が一般的に存在した時代でもあった。それでも同好の志が十五、六人、再びグリークラブの名の下に毎日神学部校舎（現カナン寮前の建物）でオルガンを囲んで囀り出すまでにそう永い日時がかかったわけではなかった。そのうち日頃関心を寄せておられた内海主事を週に一度練習時に招いては指導を受け、最初は所謂練習の基礎ともいべきものを会得した。即ち極く初歩から出発したのだったが、その間、礼拝時にはチャペルクワイヤーとして、或いは日曜学校の児童大会で奉仕しながら段々腕前を上げ、遂にその夏、八幡で公開演奏会を持つに至った。

復活したグリークラブの処女演奏会は実に意義深い。ここに当時の校友会機関誌に出されたグリークラブの報告を紹介しよう。

校友会報告——グリークラブ

グリークラブの再興は注目に値する。それ程の努力が会員たちらによってなされつつある。佐世保の牧師さんになった河野さん（西南学院大学河野博範教授）、長崎で先生をしている伊勢田さん（永眠）、京城の放送局の牟田さん（永眠）たちがウタをうたう程若かった頃は学院の音楽部も名実共ドグリークラブに違いなかった。ところがこれらの人々が学窓を去る前後からか音楽部の別名はセイナンガクイン・ストリングオーケストラとなり、我等の愛する伊藤君を上野の音楽学校に送って以来いよいよ学院の音楽部からウタが除外されてしまった。これが残念だと憤慨する程の声楽家達がおったわけじゃないが、とにかく捨てられた名前をもらって一旗揚げようと思いたった雀たちが十五、六人毎日神学部のオルガンをかこんで、ア……を始めた。

その中に市のYMCAの内海主事が助勢をしてやろうと言われる。同志社のグリークラブでうたっておられたのなら、どうせ好きな道だというので一週に一度来てもらうようお願いした。ところが皆が真剣になったかいがあって礼拝や日曜学校の児童大会等でお助けをしている中に八幡の三善牧師さん（三善敏夫教授）が八幡でやってみないかとのこと。少々不安はあったが旗挙げにはもってこいと云うので、引きうけて出かけた。伺いっても有料音楽会だ。味噌をつけたら大変だと思っていたが内海氏の指導よろしきを得て無事初舞台を切り抜けた。その上数箇の花束さえも送られて満場聴衆の拍手のうちに再興グリークラブの処女音楽会をおわった。当夜のプログラム左の通り。

第一部 西南学院校歌 全員

- (一) 男声合唱 全員 頌歌（ジャクソン）
- (二) 男声四重唱 尾崎、藤井、船越、城後 汝が罪きよめられん（ドーン）
- (三) ピアノ独奏 喜多恵子 ウォーターローの激戦（アンダーソン）

- (四) 男声二重唱 長崎、内海 左舷に気をつけよ (ウイリアムス)
- (五) 舞 謡 下瀬雪子 (イ) 青い目のお人形 (ロ) やっとこやっこ
- (六) 男声合唱 (イ) ガラリーヤ回顧 (ロ) 夕の鐘 (バルフ)

第二部 (一) 男声合唱 全員

新しい綜合曲 (アトキンソン)

- (二) 独 唱 下瀬清子 (イ) お約束 (畑喜代司)
(ロ) しだれ柳 (野口雨情)

(三) 男声二重唱 藤井、船越 望のささやき (ホーソン)

(四) ピアノ独奏 藤井初子 ボロネーズ四〇一一 (ショパン)

- (五) 男声四重唱 尾崎、藤井、船越、城後 (イ) 希望の島 (ジョウンズ)
(ロ) スキングロウ

(六) 男声合唱 全員

(イ) 平和 (ロ) 白百合 (エマーソン)

(七) さようなら 全員

近く北九州、西九州の各地で盛んにやりたいと思っている。同好の方は集まって一共にどなって下されば幸いだ。ゴシ記 (船越記のこと) 一現文のままー

この演奏会が昭和二年六月二十五日、八幡のバプテスト教会で行われたことは現在残されている当日のプログラムで明らかであるが、当時他にも随分雑多な小演奏活動が為されていたようだ。しかし当時の活動は不安定なものであり年を追って流れる縦の連なりも弱く、将来何十年も継承されることなど予想も出来なかったので詳細な記録を残すことなど全然顧りみられなかった。こんな状態だったから度々解散の危機に遭遇したのも当然だった。

この演奏会も例外ではないのだが、その頃の部員数は普段十名前後、演奏会直前からは十数名になるのだが、それでもダブルカルテットに数名加えた程度の陣容で、ステージに指揮者を必要としなかった。指揮者の内海主事といえども棒を振るのは専ら練習時に限られ、演奏時にはコーラスメンバーに加わって一緒にうたったのだった。

金のことなど

このようにして纏った活動が始まると、これまでも皆無ではなかった財政的な困難がクローズアップされて来る。斯くて音楽部への予算が器楽部の立ち消えと共に停止されていたのをそれとは別にグリー独自のものとして学校からもらうようになり、名実共に独立した部に成長したのだった。がしかし何時の世にも割り当てられる予算というものは充分なものでないらしく、普段の練習時にはピアノを弾き、棒を振る船越氏はこの方面でも頭を痛め、ついに“借金魔”の異名を奉られた。即ち演奏会を開く毎にポスター、プログラムの印刷代などクラブの名で借りた金の請求書が全部学校に来ることになった。それでも演奏会の収益があったときでもそれは諸経費の合計を上回らなかった。まして度々無料公演をたっていた当時してみれば借金しないでは活動出来る筈もなかった。ちなみにその頃の入場料は福岡市記念館を使うと所謂下足料といって五銭だったが他の会場でも大差はなかった。とはいってもこれは学生のアマチュアだからで専門家のそれと比較にならない。翌三年十月、福岡女学校 (福岡女学院) のリー校長勤続十周年記念講堂建設記念音楽会では、旧露ペテログラード帝室音楽院出身クズネツローヴ

アー女史とか、米リンコルン音楽院出身ハーダー女史に並んでヘレン・ドージャーさんも出演しているが、このときの会員券五十銭というのものもある。こんなだったから演奏旅行に行っても帰りの旅費は全額負担しなければならなかったこともしばしばであった。

こうして小さいながらもチームワークの良くとれたグリーはやがて同年十一月十九日、小倉堺町のメソジスト教会にて明治専門学校（九州工業大学）の音楽部と合同演奏会、十二月一日、本学院講堂（高等学校講堂）にて無料公開で演奏会と矢つぎ早やに演奏会が開かれ、将に時期を得て勇躍する若者達の歌声はその腹内に停るを得ずして迸り出る感があった。結成後の度々の演奏会だけが活動の総てではなく、その間には以前もやっていたようにE・S・S（English Speaking Society）の公演ないしは弁論大会のような催しには同じ学友会のよしみで賛助出演することが少なくなかった。

このようにセキを切った水の勢いでこれら若者達の情熱が燃え上がったのがこの昭和二年のグリークラブだった。

独り立ち

更に昭和三年、この年は実力を養い且つそれがために世間に認められ、九大フィルハーモニーに対し西南グリークラブと当時の福岡の楽界の一巨星となり得た年であった。

頭初の激情の時期は過ぎやがて冷静に着実に歩む気風が見えて来た。部員も二〇名を数えるに至り、決して週一回の練習を守るようになった。後続の輩に、徳永、万年氏らが続き、グリークラブは益々充実していった。立派な品物にはやはりそれ相当に立派な包装を施すように、内容がしっかりしてくると外側もはっきりした、しっかりしたものが欲しくなるのが人情だろう。ここに再び船越氏の筆になる校友会報告の中から引用しよう。

グリークラブ部（グリークラブの名称について）

部報を何か書いてくれないかとのこと、別に書くこともない。しかしこの機会に一言述べたいことがある。——中略——元来グリークラブなる名前は声楽の団体のみ附せられるべきである。それはその歴史⁴を考えると分かる。たしか一八二〇年前後のことである。所もはっきり憶えていない。多分ニューヨークだったと思う。歌を唱うことが非常に好きなカレッジボーイが二三人いた。彼らは集ると常に唱って喜び遂に家の中にじっとして唱っていることができず大通りを唱い巡った。それを聞いた人々のうちから彼らの組に加わる者が出来て、遂に歓喜に充ちたバンド、即ちグリークラブなる名称が発せられるようになった。グリークラブなる名称の附せられるバンドは常に男子の団体に限られているようで、また必ず声楽の団体であるようである。否あるべきだと思う。——後略——ゴシ生

こうしてグリークラブという名称を再確認せずにはおれなかったのは、コーラスだけの独自の発展をある程度遂げたものに芽生えた自覚を意味するものであろう。

そうこうするうちに、再興以来第四回目の大きな一般公開演奏会が福岡市記念館で開かれた。昭和三

⁴ 原文のママ

年十月九日、東大新人会幹部が検挙された翌日といえば当時の時代相がかなり明確になるかも知れない。いやそれよりも今上天皇御大礼のためその御大典の祝賀気分に残りの国民がひたっていたといった方が昔を知る人にはビンとくるだろう。そんな時に入場者約千人を集めて盛会のうちに、やはり下足料五銭の公演を了えた。

この頃、中井義雄の後を継いで指揮棒をとった毛屋平吉の指揮の下に器楽部も再び奮起し、この夏には既に猛練習を開始していた。かくて器楽合奏は音楽部、コーラス合唱はグリークラブとして名実共にそれぞれ独立した存在として、完全な二本立ての活動が行われるようになった。ここで音楽部即ち器楽部活動についても触れねばなるまい。そのために雑誌「西南」の第十五号にある学友会報告より通信文を掲げよう。

音楽部

陽春三月、先輩西見、山口、瓜田の諸兄を送り出した我が部は、新学期開始と共に新たに坂本部長を迎え、猶三、四の新学期員を加えてかつてのゴールデンエージを再現せしめんものと楽譜を暗記するまでに練習を始めた。

十一月二十四日、ミュージックファンの絶大なる期待の下に大演奏会を記念館にて開催した。この日、越尾氏のピアノ演奏会とダブったが聴衆意外に多く、会場は文字通り立錘の余地なく、曲毎に送るアンコールの凄じいほど場内を圧した。かくて盛況裡に十時閉会した。

左に当日のプログラムを掲げる。

十一月二十四日 於記念館

福岡日日新聞後援

毛屋平吉氏指揮

第一部

- 一、グリーテング
- 二、船歌、コザヨクの酒宴
- 三、ピアノソロ
- 四、詩人と農夫

第二部

- 一、椿姫
- 二、緩徐調、小夜楽
- 三、スパニョシュ・ダンス
- 四、軽騎兵

以上 一現文のまま一

こんなノンビリした素朴な時代ではあったが、また一方かなり粗野な時代でもあったようだ。北九州とはいわず、どこで演奏会を開いても土地のヤクザが押しかけて無料入場はもとより、因縁をつけていくらかものにしてしようというようなのがしばしばあって、自然グリークラブにも自衛態勢が出来ていた。阿部勇氏を先頭に腕白が何人か、みな人一倍のファイトの持主であり、こんな何人かの影武者が演奏活動をスムーズに運営し、クラブを存続させるに力あったといえなくはない。

これ程にチームワークもとれたグリークラブが再興以後最も華々しい演奏会をこの年も師走に入って久留米で開いている。これこそ、昭和三年の成果の結集であり、再興以来の努力によって出て来た解答である。それでここにやはり船越氏になる報告の名文をそのまま全文披露して当時のメンバーが味わった感激を共にしたいと思う。

第五回久留米演奏会の記

十二月八日（土）数日前迄雨天続きで心配していた天気も之の日は特に恵まれた小春日和である。部は十八名四時に博多駅に参集し直ちに列車の人となる。皆の顔は嬉しさにはちきれそうである。車中は和気霽々たる気分が満ちている。子供らしき談笑今晚の予想談、取々に列車は早くも久留米に着いた。医専の部員に迎えられ会場なる荘島校に自動車を走らせる。町の辻々或いはショーウィンドウの中に黒白のパツとするようなポスターが目につくのが何となく嬉しくて仕方がない。

六時、準備全く出来た会場へ着く。予想外に堂々たる立派な建物である。小学校の講堂にしては余りに広大な構えである。ピアノは独逸製高級グランドピアノが備えてある。一同の気分益々晴れやかになる。六時というに早や電車通りから講堂まで我等の演奏会へとおしかける者は引っきりなしに続いている。七時には早や会場は満員でプログラムは一枚も残っていない。

医専の音楽部委員内藤氏への挨拶で演奏会の火蓋は切られた。一同止めども無い拍手に迎えられて壇上の人となる。先ず学院校歌に味を見せる。此の種の音楽の無かった演奏会のため其の人気は絶大である。次にプログラムの概要を書いてみると――

校歌はユニゾンではあるが西南学院隅其のものを現している様な気持が聴衆には聞きとれた模様である。続いて合唱新綜合曲に移る。之は大変愉快的な気持のよい歌である。福岡で演奏の際には多少変な所があった様だったが今度は好成績であった。送別の歌（ダブルカルテット）、静かな離別の気分がよく表れている。

先週九大のグリークラブが演奏したるも余り良くは無かったが我等はこれを最も得意とする歌である丈に聴衆を全く陶醉させた様である。ミス・ドーチャーのピアノ独奏は之の地に於ける珍らしき演奏であるだけに大いに期待せられていた模様で爽快なしかもデリケートな同嬢の指が鍵盤に触れるや爽快な曲に心も身もうばわれた如くでアンコールの拍手は留めどもなく続く。次は最も力を入れた男声四重唱である。特に「おい、ジョンを呼ぼう」の如きは学生らしい軽いゼスチュアが聴衆に可笑を与え、拍手に続くアンコール。再び壇上に立つ。第一部の終る頃まだ聴衆はおしかけている模様である。然し最早や入る余地は全く無いので仕方なくステージの前の方に座を敷いて其処に座って貰ふ事にした。五分休憩の後第二部のコーラス、「ヴォルガの船唄」に移る。之はコーラズス特に男声のコーラスとして適し最も勇壮な歌である。然も我らのコーラズ中最も得意として又よく練習したものである。海の彼方に幽に見ゆる船が近づきて目前に來り歌は其処でクライマックスに達し再び彼方の地平線に消えて行く処等がよく現はされた歌である。ミス・ドーチャーのピアノソロも前に好評を博しているだけにプログラムがめくられるや破れるやうな拍手に迎へられて聴衆を全く魅し去立再びアンコールを受く。次の四重唱も前同様の喝采を受け、特にアンコールのジョニーシュモーカーは英謡と独乙語まじりで面白いゼスチャーは全く聴衆の腹をかゝえさせる程に笑はせた。斯くて二部二十曲悉く喝采の内に十時閉会した。而し聴衆は立去りかねて名残りを惜しんでいる。部員一同及医専学友会の御厚意なる親睦会に招待待されて米屋町金文堂四階の会場へ行く委員及び音楽部長八津教授の挨拶及びグリークラブを代表して船越君感謝の意を表す。ともに此の後の親善を計り旧友の如く語り名残りを惜しみつゝ十一時半急行電車へと急ぐ。此の日の聴衆は二千を確実に数へられた由にて後の評判によると荘島校に斯く多数の者が入場したる事は今まで例が無かったとの事である。

今やグリークラブは旭日の如き勢いで其の風評を斯界に響かせている。本年度は九州一巡の計画さへ

5 略字変更

立てられ二月十一日には直方の同好会から招聘される事になっているし、一月の二十六日には佐世保より招聘される事に確定している我らのグリークラブの永遠に栄えんことを祈りつゝ筆を置く。三越生
こうしてここまで発展して来たグリークラブはやっと縦のつながりを持つようになり、将来次々に受け継がれて行く気運が見えて来たのであった。

創立十周年を迎えたグリー

<昭和四年>

グリークラブが教会のクワイヤーとして誕生して以来、既に十年の歳月が流れた。迎えて十周年、十周年記念の演奏会くらい開きたいところだが、悲しいかな当時のダグリークラブの活動はメンバー不足のため低調、記念演奏会は開けるはずもなく、又開こうともされなかったのだろう。たまに演奏をする場合、出演のグリーメンは十名前後であった。又、前年の十二月に久留米の荘島小学校で行なった演奏会は、初めての公式演奏旅行であって、人数不足のため他のクラブから臨時メンバーを狩り集めて来て連れて行ったそうで、その時でさえ十八名だった。このように初期のグリーはメンバー不足時代が続いている。学校それ自体の学生の絶対数が少なかったのでメンバー不足は致し方のないことではあった。

昭和二年に死亡し、当時のグリーの良き指導者であった、そして現在でさえも早世を惜しまれている中井義雄氏亡きあと、数少ないメンバーのグリークラブを支えたグリーメンは船越義雄氏だった。同氏の指導で学生内の統制をはかっていた。当時のグリー外部からの指導者として内海孝夫氏（グリーO・B・内海洋一、敬三氏のに岳父）、鶴原龍二氏（鶴原太郎氏岳父）が指導に来られていた船越氏はグリーにあって指揮者としての存在であった他、マネージャーとしての存在でもあった。当時グリークラブは以前器楽部の活動が活発であったため声楽としては余り活動していなかったので予算が少なく、器楽部の衰退と共にグリー（声楽）の予算は殖えはしたが、その額は余り多くはなかったから演奏会を開催するに当り、氏は借金が出来るところから借り歩いたため（前にも書いたが）“借金魔”という異名さえ頂戴するまでになった。そういうあだ名をつけられたにも拘らずグリーのために尽した氏の功績は大きいと言えよう。予算の少なかったグリークラブを維持するのに、演奏会を開いた場合、赤字の出るのは致し方のないことであった。

このような苦労談もさることながら、当時演奏会が終った場合、関係者の苦労をねぎらう意味で演奏会の“打ち上げ”が行なわれ、その場所が“飲み屋”とは、いつの時代においても変わらないものである。しかし、借金のできた大きな理由としては何ととっても当時は無料演奏会が多く、クラブとしての少ない予算では到底まかない切れなかったということである。

かくの如くして創立十周年を迎えたグリークラブは、数こそ少ないメンバーであったが、小さくまとまった形でその命脈を保ち続けて来た。これもひとえに当時のグリーメンの合唱に対する情熱が、軍隊の配属将校から「歌をするものは軟弱にすぎる」と言われながらも、今日のグリークラブを築いた大きい足掛かりと言ってよいであろう。なお昭和四年にはグリーメンの卒業生が無かったので前年度よりのメンバーに新しく新入生を加えて、この年は充実した年であったと思われる。

沈滞状態続く

<昭和五年>

前年は一名の卒業者もなかったが、この年は主力メンバーの抜けたグリー（そのためにストリングは自然消滅しかけたが）の後を受けて、衰退しかけていたグリーの再興をしたとも言える船越義雄氏をはじめ、歌わぬメンバーこと阿部勇氏（マネージャー）、又ストリングでピアノの伴奏をしていた佐多一郎氏（このころ小規模ながらストリングも存続していた）、そして三年の時は伝導のためにグリーを休部して、西南学院高等部を文科と神学科とを二度にわたって卒業した尾崎主一（現西南学院教授）を含め九名の卒業生を送り出した。先輩を送り出して後、その後を受けてグリーの指導に当たったのは徳永麟之助氏だった。氏は昭和三十四年の四十周年記念演奏会に初期の指揮者として指揮をしたが、昭和三十四年度のグリークラブの指揮者であった徳永和彦は氏の令息であり、四十周年記念演奏会は親子二代で指揮をした。グリークラブの四十年の歴史の中で親子でしかも共に指揮者であったという例は他にない。グリークラブの貴重な存在である。なお、昭和四、五年の資料なり記録が残されていず、調査に当たっても詳細なことが明らかでない。この間の稿は後日に譲ることにする。

伊藤武雄氏のデビュー演奏会

<昭和六年>

前年大量のメンバーを送り出したグリークラブは、その後活動した主力メンバーの六名を送り出した。その中には在部中指揮をしていた徳水麟之助氏、河野博範氏、万年良信氏等カルテットのメンバーがいた。グリークラブの主力メンバーが抜けたわけである。

日本の中国に対する強硬政策により、柳条溝事件を発端に満州事変がぼつ発した。日本軍部の行動は強引で、翌年三月には軍部の傀儡政府の満州国を作りあげたのが当時の情勢であった。

学院が大正五年に創立され、この年は学院の創立十五周年にあたる。五月十一日、グリーは学院の創立記念式典に出席、西南学院有志として数名で校歌、賛美歌等を合唱、また伊藤武雄氏の独唱もあった。

七月十一日には「西部高専寮歌の夕べ」に出演して校歌を放送した。出演者は七名。ダブルカルテットにも足らぬメンバーである。各校競演の結果は市内の識者の評によると、独唱を除き合唱の部にて西南を以って第一と為すべしと。是の成功は勿論作詞者及び作曲者に帰すべしと雖も尚発声者の功は消ゆべくもなし、と当時の“西南”に報告されている。メンバーは少数ながら実力は相当あったらしい。これも永く続くグリーの伝統と当時のグリーメンの練習の賜ものであったといえる。

又、毎年NHKの子供番組に徳水麟之助氏と共に出演していたグリーは、この年には「独唱と合唱」という十二月十九日午後六時からの番組に出演、徳水麟之助氏の独唱「冬の夜」（伴奏はベーカークラス）とグリークラブは氏の指揮の下に（四十周年記念演奏会で歌った）「新しき歌をエホバに向かいて唱へ」と「荒城の月」の二曲を合唱している。

又、この年に特記すべきことは、昭和二年に西南学院高等部を卒業したグリークラブのOB伊藤武雄氏のデビュー記念演奏会が五月九日（土）に開かれたことで、福岡日日新聞によると、「福岡出身のリリック・バリトン歌手、伊藤武雄氏の郷土に於けるデビューは、九日夜市記念館に於いて西南学院学友会

主菜、本社後援で開催、定刻にシューマンの「詩人の恋」より演奏開始され、「菩提樹」「何処へ」等順次、しぶい明朗な発声により唄いこなし、スコットランド民謡「アニーローリー」の美しさは氏としては絶賛すべき唄い振りで皆感動した。二部では「ひがん花」「からたちの花」でバリトン特有の浪漫的な情緒を描出し最後の歌劇「ファウストより」までよく唄ったが、上野派では実に将来性ある出色の歌手として推賞すべき人であろう。」

西南学院を卒業後、東京芸術大学へ行った氏の郷土でのデビュー演奏会であるが、当時のグリークラブとして先輩の独唱演奏会があったという事実は誇り得ることでやはり特筆しなければならない。

福岡最初の混声合唱団誕生

<昭和七年>

当時のアジアの情勢は、昭和六年日本が中国において満州事変を起して一年、遂に強引に日本の傀儡政権「満州国」をつくっていた。日本政府のこのような無暴な行動の最中に、我々西南学院グリーンメンは歌うことを青春の最良の表現具となし、歌なき人生は暗やみであり、人生に歌なくしては何の楽しみも残らない……と学内誌「西南」に書いてあるが、ここにその全文を紹介してみよう。

「うたは青春の最良の表現具なり。うたなき人生は暗黒にして枯骨と化す。朗らかにうたへ——悲しがるうとも、淋しいとき怒りっぽくなったときにも、口惜しいときにも常に朗らかに——朧月を仰いでうたひ、彼女と対してはうたひ、野に出でてはうたへ。将又真夏の空の下でスポーツするとき、畠に鋤するとき、常に雄々しくうたへ。うたなくして青春なく、人生なく、はた文明あるなし。」

人間の生活から音楽を取り去ってしまったら、その生活は虚無な、味気ないものになってしまう。音楽あつての生活であり、それなくして果して人間が生涯を維持出来るかどうか解らない。古の時代から人間は音に対して共鳴点のようなものを持っていた。土人の太鼓の音から現代のジャズに至るまで、みな人間の作り出した音である。その種類は色々あつても究極の目的は、音楽することによって自らの或いは他人の心の慰安等のために行なつてきて現在まで発展したのである。音楽と人間生活は不可分の状態にあるといえる。

しかしいくら音楽といえども、ある程度それが高度化すると、環境がそれに伴わねばやはり伸展しては行かない。我が西南学院グリークラブがその誕生から現在までの存続にしても、誕生当時キリスト教系の学校として外人の宣教師がいたこと、そして学校の中で賛美歌等を歌っていたことが初期のグリーンメンに合唱に対する情熱をかき立てていったといつてよいであろう。讃美礼拝の後教会でミス・フルジュムの下にオルガンをかこんで、イガグリ頭の少年達が声をそろえて歌っていたこと、そして教会の礼拝に学院のチャペルの時間にチャペルクワイヤーとして参加するようになり、そうすることにより、ますます音楽する機会が殖えて行き現在にまで至っている。その証拠としては現在日本において西南学院よりも古い伝統を誇る関西学院グリークラブ、同志社グリークラブ等、みなミッションスクールの学校である。又、世界の各合唱団においても、教会と密接な関係を持つウィーンの各合唱団、或いは日本で最初に誕生した関学グリーがその名称を求めた、アメリカの各大学のグリークラブにおいてもみな宗教曲を歌い、最初に出来た時は教会と深い関係があつた言かねている。

又、当時の世界情勢は、やや陰悪の状態であったが、グリーンメンは歌うことにその喜びを感じていた。

この年の福岡における音楽界の活動の一つとして福岡最初の混声合唱団が誕生したことは特筆しなければならない。メンバーは当時グリークラブの指揮をしていた徳氷麟之助氏を始め、市内の学校の音楽教師の集まりであって、その人数は十六名程度であった。市内の一般合唱団として、又、混声というハンディキャップの多い合唱団として、この年に初めて誕生したもので、その活動から将来を楽しみにされていたのである。なおこの年、グリークラブの活動は五月二十四日にNHK福岡放送局で、ここ数年、子供の時間に数回放送していた徳氷麟之助氏を助演していた。この放送後、遠くは門司、熊本各地から激励の賛辞を受けたという記録が残っている。又、同年七月に小倉方面に演奏旅行に行くため、部員二十数名でもって練習に励んでいるとの記録が前年度の“西南”に残っているが、次年度はグリークラブに関する記録（部報の中に）が載っておらず、さだかではない。又十二月三日に「第八回西南英語大会」並びに「第一回西日本中等学校英語演説大会」が学院講堂（現西南学院高校講堂）にて福日、大毎両新聞社の後援で開かれたとき、学院のハーモニカバンド、西南女学院のハンナ女史のピアノ独奏等と共にグリークラブもこの大会に賛助出演している。そのとき歌った曲は、先ず学院の校歌を歌って開会（これは現在も学院校歌として歌われている水町義雄先生の作になるものである）し“ローレライタ”“兵士の歌”の二曲を合唱した。そして当時のE・S・S部の部報に於いて、英語弁論大会が主目的であったにも拘らず、音楽会の如き感もないではなかった、とある。賛助出演が多かったし、各々優れたものであったからそうなったのであろう。グリークラブは当時E・S・S部との関係が深く、その英語大会には毎年賛助出演していた。

回顧録

船越 義男

今回計らずも山口市に於ける第三回西部三大学合同演奏会に列席するの機を得、後輩諸君のその進展の目ざましさ、優美豪華なる曲、美しいハーニー、そしてそのテクニックのこなしのすばらしさに陶醉し、暫し総てを忘れありし日の学生時代の懐旧に浸り、うたた今昔の感に耐えず思わず涙を流した。

グリークラブ四十周年記念誌に一筆をとの要求に臆気なる記憶をたどりながら、初期のグリークラブの思い出でも書き、貴重な頁を埋めさせて戴こう。創立四十年と銘打たれ今更ながら自分の年齢を数え直してみた。

四十年と誰が計算し、誰が云われたのかは知らないが、私もその一員であることを逆算して目見てその辺から懐古して見よう。

四十年前とは大正九年と算定される。私は大正十年に中学部に入っているとすれば、私が入学した当時、創立者達は五年生であった筈。当時、寄宿舎は大名町にあった。旧校舎を移し寄宿舎とし、寄宿生は毎日曜朝、中学部第二校舎の二階の一室に於いて、ドージャー院長司会・日曜礼拝に出席せねばならなかった。礼拝時は、当時学院唯一の楽器であったベビーオルガンを囲み愛好者数人、讚美歌やワン・ハンドレッド・アンド・ワン・ペストレ・ソング中の曲を合唱練習し、日曜の一時を楽しんだ。

その人々の中には、伊藤俊男、武雄兄弟、河野博範、尾崎主一、河野幹貞等の諸先輩がおられた。こ

れがグリークラブ発祥当時の在り方であったろうか。時には寄宿舎内に於いて練習し、時には簀子町の教会に於いて聖歌隊の役目を果たしていた。しかし、二年の内には彼等先輩はみな高等部に進学されたため、グリークラブはそのまま高等部に持って行かれた形となりたるも彼らを中心とする器楽部の編成により自然旧グリークラブの名前はそのまま器楽部に冠せられる成り行きとなった。

大正十二、三年頃、中学部に於いては内海主事の指導の詐にYMCAが創立されたが、内海氏がかつて同志社時代、グリークラブの一員たりし関係で男声合唱に造詣ありしたため、我々YMCAを中心としたグリークラブの再建を促した時、既に高等部には合唱団はなく完全なる器楽部と化していたため、合唱団は中学部内に再建された。私が高等部に入学するに当り、再度中学部のグリークラブは高等部へと持ち込み、広く学生中より同好者を募集し、はっきり声楽部だけの会を具体化させることが出来た。

(勿も二、三の中学部の生徒も加えられていたが)のが昭和二年頃だと思ふ。毎週一、二回講堂や内海主事宅、或いは鶴原龍二氏宅に於いて練習を積み、対外的に発表するチャッスを狙った。

当時、校友会費の配分については各部がその部賞の獲得に懸命の死力を尽くし、時あたかも軍国主義の台頭と相待ち、運動部重点主義となり、グリークラブの如きは軟派的或いは女性的のパーティーと做され、部費の割譲等以つての外と無視された。従つてグリークラブとしては自活の道を開くより外に道なく、これを目途として練習をはげみ、各地に開催援助の運動に奔走した。その機を得たのが八幡市での第一回有料演奏会だった。しかし、これは主催者たるバプテスト教会の慈善音楽会であつて見れば多くの資金を獲得することも希めず、市内記念館、学院講堂での定期発表会の外、爾来、門司、小倉、直方、久留米等に於いて教会関係、明専(九州工大)、久留米医専(久留米医大)或いは僅少の先輩諸氏の援助の許に演奏会をやってみたが、当時、器楽演奏会は各地に於いて開催されたるも声楽演奏会に関心を持つような人は極めて少なく、従つて思うように資金を得ることは出来ず、入場者を多くするためと税金をのがれるためには無料に等しい入場料を会場整理費或いは下足料の名目の許に、五銭、十銭と徴収するより外、道はなかつた。従つて会を重ねる度毎にその負債は増す結果となったが、その反面、西南グリークラブの名は外部に急激に認められ始めたが、これ等の負債の支払いには各自少しずつの小使いを出し合い、私等は月謝を流用したり、余り借金取りにせめられると苦しさ余り親をだましては金を取り、借金払いに当てた。

当時私は「ゴシ」又は「三越」の暱称で呼ばれていたが、遂に当時日本の財界の主鎮だった石井翁が借金のため没落したことに因み、私は「石井借金王」とまで有難くない、いやな愛称に変えられていた。しかし我々の努力も遂に報いられ、校友会の一部に正式に認められ僅かながら部費を得ることが出来た。しかもこれは既に器楽部の没落したのにも多少基因していたであろう。

斯くて資金的には一応安定したが、男声合唱曲の入手には全く苦勞した。当時は男声合唱団は特定校の外には殆んどなく、特に九州に於いては外に皆無、従つて楽器店や書店にも混声或いは女声合唱曲はあつても、男声曲譜は全く無く、内海氏や鶴原氏等から僅かに借り出し、又は混声や女声曲を編曲することに腐心し、又、ワン・ハンドレッド・アッド・ワン・ペスト・ソングの中讃美歌の中から選んだ。

現在のような大物を手がける等思いも及ばなかつた。それだけに内容に於いて貧弱、幼稚であつたことは否めない。演奏会として一番印象に残っているのは、第一回八幡に於ける有料演奏会と佐世保の演奏会の感激であつたらう。特に佐世保の場合、海軍共済会館は満員の盛況で、翌朝は教会員の中の一海甲下士官の好意で当時の巨大艦陸奥(むつ)の見学案内され、艦内見学中二人の若い海軍将校に会つたところ、彼等は「君達は西南のグリークラブだな。昨晚の演奏会を楽しませて貰つたお礼に私達が今

から艦を案内する」として私達を引取り、艦内特別公室まで案内し、当時極秘潜水艦イ一何号の艦の中まで見せて貰い、又当時としては最高の荣誉と思った陸奥の主砲を背景に、将校二人をまじえ写真を写真兵に写して貰い、上陸後は水交社に於いてすきやきをたらふく御馳走になり駅まで送って貰った。演奏会に行き、このような気持の良いもてなしを受けたのは初めてのことだっただけにとても嬉しく印象に残っている。

あの二人の若い将校達もきっと太平洋戦で華々しく戦い、或いは戦死されたかも分からぬ。しかし、もし生きておられれば西南グリーの名を見聞きされる度毎にあの日のことを思い出していただけることと思う。

歌は時に人に深い感銘を与え、人の心を温かくする。

爾来三十有余年、グリークラブにも辻余曲折はあったことと思う。しかし、たゆまざる努力の結果は毎年のコンクールに優秀なる成績を得、それを新聞等で知る度毎に我れながら一粒の麦であったことに誇りを感じると共に、又羨ましく思っていた。若人よ励め、そして益々その成果を挙げられんことを祈る。

(筆者は昭和五年旧制高等学部商科卒・グリーOB)

希望の島

徳永 麟之助

人間で云へば四十才と云う年輩は最も活躍の出来る働き盛り。西南グリーも今年で四拾年を数ふるに至り、云わば活躍の最盛期に達したと云え。四拾年前に、二三人の人が集まってグリークラブの名の示す様に楽しく歌った時代から今日のグリーの発達……歴史的に見るとただ四拾年の年をけみしたことに止まるわけですが、四拾年この方グリーが継続されて、今日に至ったことは、全く珍しい存在の一つと云うことが出来ましょう。西南学院と云うよい環境の賜物と共に、グリーの精神に徹して、今日に及んだ精神的なつながりが、あずかって力があつたことと思います。今日四拾才のグリーがその年令に恥じず、福岡はおろか、日本の合唱界に大きな足績を仰しつつ活躍しておられることを日々限りのあたり見聞きして全く心強さを感じると共に、懐旧の念におそわれて来ます。

私がグリーに居た頃はグリーが十四～五才の少年時代でした。やっと声変りしようかと言った時代でした。僅かな人数(二十人位)、未だ合唱と言うものがめずらしかつた時代、レパートリーも大変少ない時代、そんな時、一人前になろうとして猛烈な練習……演奏会の計画……演奏旅行等やっとびっこを引き乍らも着々とそれ等のことを実施に移し、と懸命の努力をした頃でした。毎年、定則演奏会をやりたいたいものと言うことは当時のグリーの各メンバーの夢でしたが、とうとうそこまでは出来ずに、憾みをのんで次第に移って行ったわけです。

今日グリーが四十年の年を祝うにあたり、昔を今に変えて、OBだけがOBの指揮で歌おうじゃないかと言うことで、ただ——西南の歌——この心につながって恥をしのんで歌い、且つ振るわけです。今、私が振る“希望の島”は今ではむしろ押し入れの中にしまいこまれそうな曲です。それでも当時はレパートリーとして貴重な曲目の一つでした。単純なハーモニーです。然しこの曲の中から西南グリーの少

年時代の姿がまぶたに浮んで来ます。然し又一面、歌っているうちに今日のグリーの姿が、デンと眼前にふさがって来ます。今日の成長したグリーの姿も又、更に大きく成長して行くでしょう。将来の姿の前には小さくなることでしょう。成長して行くためには、今後グリーの皆さんや、周囲の皆さんの御声援と御協力が加えられることでしょう。西南グリーに、日本一の名を冠することもそう遠い将来ではないでしょう。実現されぬ夢ではないでしょう。

先輩の一人として、夢の実現に、一步一步と近づく努力を皆さん方が重ねられんことを切に祈るものです。 =現文のまま=

(当時のOBの思い出の曲)【四十周年記念ステージプロより】

復活第一回定期演奏会開かれる

<昭和九年>

ここ数年間、グリークラブは活動が余り活発でなかったようだ。しかし昭和九年になってグリーは以前の低調さを破って活動を始めた。昭和十年発行の西南学院新聞によると、「七月七日九州日報社ホールにて復活第一回定期演奏会を行ひ、さしもの大ホールも満員の盛況を呈するに至り、長く市民に忘れられていたグリークラブの存在を十分認識せしめた」とある。この記録にある「復活第一回定期演奏会」としたことは、それ以前のグリーの活動が一時低調だったことを示している。事実グリーが以前公式の定期演奏会を開いていなかったたらしく、数年前は簡単な演奏会を開いているが、定期演奏会と言えるものではなかった。

この年になってグリーの活動は活発化し、恐らくグリークラブ最初のものと言える「定期演奏会」が開かれたのである。“復活”という意味は以後定期演奏会を続けて行くことを目的として、活発化したグリーの活動を示すものと言える。事実この定期演奏会は昭和九年を契機として第九回まで続いている。

一方、昭九年のグリーの活動状況は、七月七日の復活第一回定期演奏会を始めとして、十二月二十六日の全九州高専音楽大会に出場、六校出場中、声楽の部で優秀な成績を収めた。この大会は、ここ数年、年に一回開かれて続いているがグリーはいつも好成績を収めていた模様である。その他に賛美礼拝でのチャペルサーヴィス、そしてダット博士説教会でのサーヴィスなどを主なものとして、数多くの演奏を行なっている。かくの如く活発化したグリークラブの活動は昭和十年代へと移って行く。時の世界情勢は第一次大戦で降服したドイツが、ヒットラーの下に再軍備を宣言しアジアでは中国に於ける日本とのにらみ合いにより陰悪な状態が続いていたが、蘆溝橋事件を発端にして財界は第二次大戦の時代へと突入して行くのである。

第二期基礎時代！

<昭和十年>

この年あたりから世界情勢の雲行きが怪しくなってきた。日本国内に於ても軍部当局の政治に対する圧迫は段々と加わってきた。我が学院内に於ても軍事教練など盛んとなったが、それにも拘わらずグリー

ークラブもここ数年演奏活動は停滞していた状態だったのが、昨年から定期演奏会をもち、グリー第二期の基礎時代が始まったといっても妥当であろう。

復活という名称でもって行われた定期演奏会も今年で第二回目を迎えた。

年一回の定期演奏会を目標に部員は精進した。週二、三日の練習をもち、演奏会が迫れば毎日練習という今も昔も変らぬ練習状態であった。学院の中学部の教師と高等部の音楽の嘱託をしておられた徳永先生に練習指導を受けていた。先生は学院高等部在学中からグリークラブで指揮をしていて、卒業後九大在学中にもかかわらず、わざわざ練習の指導に来られた。かれこれグリーに関係して前後十年間になるろうという、グリーにとっては忘れられない大恩人である。先生は素晴らしいテナーで、メンバーの少ない時にはトップのパートで歌われるという大いなる活躍をしておられた。又、同じ中学部の教師をしておられた今泉先生（現玄海高校）は、グリーメンバーの一員として、パートメンバーの足りないところで唱う即トップからベースとどのパートでも歌いこなすという一寸類のない珍しい方であった。この二人の優れた先生の指導によってグリーは順調な歩みを進めたのである。

十月には姉妹校西南女学院に於て、新講堂（落成記念式典）にて演奏会を催した。それについて当時の西南学院新聞は、「グリークラブでは十月十二日、小倉市西南女学院新講堂に於ける演奏会に出席することになった。回顧すれば水町院長グリークラブの部長たりし頃、九州各地に演奏旅行を行いし後、長らく部として演奏旅行らしきものをしなかったのであるが、此の度この機会を得たのは大いなる喜びである。小倉市民に学院の存在を認識せしめ、又、グリークラブの発展の好機会として部員一同大いに努力している」。

この文章をみても分かるように、グリークラブとしては、何かのキッカケを作って一層の発展を成し遂げようと願っていた。

十一月には、この頃とみに躍進して来た九大グリークラブと合同演奏会を開いた。合同演奏会といっても実際には競演の形をとり、お互いに闘志を燃やして熱演を展開した。徳永先生が西南、九大の合同指揮をされた。これは当時としては画期的な出来事であった。

基礎時代Ⅱ

<昭和十一年>

この年、青年将校を中心とした陸軍部隊の二・二六事件が起った。この事件と前後して日本ファシズムの支配はほぼ確立されたといえよう。それに伴って国円の民主主義的、自由主義的勢力に対する圧迫は強行された。言論の自由が制限され始めたのも勿論である。

だがこのような世相の流れにも拘らず、福岡西端の一角に芽生えた西南学院は、創立当時の中学部の数十人から、現在の多きに数えるまで（その間高等部が設置され、それにつれてグリークラブも中等部から高等部へと昇格した。）順調に発展して、丁度本年で創立二十周年を迎えたのである。

学院創立二十周年記念行事は色々取り行われた。しかしその中でも西南学院創立二十周年記念音楽会と銘打った音楽会が行事の華であった。出演者は姉妹校西南女学院の教師、当学院の教師、それとグリークラブで各々演奏がとり行われた。これに先立ち、J O L Kにて記念放送を行った。当時唯一の男

声合唱団としてよく放送は行っていたので演奏は手なれたものであった。

ここで西南学院新聞に掲載された回顧録“創生期より現在まで”の記事をひろってみると、「音楽部も最初からの部であって一年も経たないうちに器楽部を設けて、声楽はミス・フルジュム、器楽は中井義雄氏の下に、大正十一年十月、第一回の演奏会を記念館にて催した。市内各女学校の団体入場等聴衆数千に達し非常なる成功を収めた。次いで翌十二年十月には、小倉、別府、飯塚等を巡回して、亦異常なる歓迎を受けたのである。だがこれ程盛んだった声楽部も伊藤君が音楽学校に去ってから、声楽は沈滞し始め、器楽もそれにつりこまれていった。然しそれも部員の熱心によって、昭和二年グリークラブは再興し、現在では往年の活動振りに及ばずと云えども漸次なる飛躍を示して来た。やがては西日本に西南音楽部の全貌を現わす時が来るであろう」

第三回定期演奏会を開くにあたり、練習量をカバーする意味からも初めての合宿を百道の松籟館にて行なった。この合宿は部員間にも仲々好評で、今後も機会あるごとに、どしどしやっていく意向となった。

演奏会当夜は天候定まらず、聴衆も多いとはいえなかった。だが演奏内容は立派なものだった。特に圧巻は今は亡き北川治男（寿永）氏のソロで学生ばなれのした声は聴衆に多大の感銘を与えたのだった。

又、丁度時を同じくして、前述した福岡混声合唱団の第三回定期演奏会が開かれた。この合唱団は特に福岡市内各中学の教師を網羅したもので、民秋重太郎氏（現梅花女学園園長）の膽入りで、徳永麟之助氏との協力で作られた。第一回定期演奏会は市記念館にてメンバー十六名をそろえて開いた。合唱団男声部のメンバーはグリーメンにて主に占められていた。たがこの合唱団も徳永氏が去るに及んで解散の憂き目となった。ここに於いてもグリークラブの福岡の合唱界に於ける活躍と大いなる存在が目立つのである。このことは後年になっても言えるのである。

Seinan News Fukuoka Tuesday. June 25. 1935

Musical Lovers Await Glee Club Concert.

◎ Members Earnestly Rehearsing.

Fukuoka: As the paper goes to press the finishing touches are being given to what promises to be the best concert the Seinan Gakuin Glee Club has given during the past few years, which is on the evening of June 15th from 7:30 P. M. at the Fukuoka Memorial Auditorium.

Among the numbers that are to be given are:

1. Ave MariaJacob Arcadelt
2. Die Ehre GottesBeethoven
3. Deutsch MesseSchubert
4. The Song of the⁶ SoldiersJ. C. Granham

The club this year is under the direction of Prof. R. Tokunaga as Director and instructor. Mr. T. Goto as Manager and Prof. E. B. Dozier as Departmental Faculty Advisor. The club has a membership of approximately 25 members. They have been diligently working for over a month in preparation for the concert. Prior to the concert the broadcasting station in Fukuoka has asked that they give a program over the air. It is generally understood that the Seinan organization is certainly one of the best, if not the best, male Glee Club south-west of Kobe, which means that we have a very rating in southwestern Japan.

◎ Director Tokunaga

The institution⁷ is fortunate to procure the full time services of Prof. Tokunaga as teacher and instructor. Though he teaches other subjects he has unusual talents in the field of music. A graduate of the College department he studied further at the Kyushu Imperial University where he received his Master's degree in History. While in this institution as a student he was a member of the Glee Club.

He continued his musical studies at the University to the extent that he has a teacher's license for the teaching of Music in High Schools. He was a leader in the University Glee Club. All the way through he has helped much in the Lutheran Church of this city in its music.

His presence in our institution is having a great⁸ deal to do with the progress in musical appreciation and interest.

◎ In Oter⁹ Years

As far back as 16 years ago can the Glee Club date its birth. From those years we glean a few facts.

⁶ 原文のママ : the ?

⁷ 原文のママ : institution ?

⁸ 原文のママ : great ?

⁹ 原文のママ : ?

There was a time when Seinan Gakuin had a very active group of musicians who participated¹⁰ in both the Glee Club and Orchestra. There were about thirty of them in all. They contributed not a little to the building up of the Seinan Spirit and culture which we enjoy at the present time. Several of them are playing important roles in society at large at the present time. Among them we can point with pride to a Professor in the Music Academy in Tokyo.

Owing to the decease of a talented¹¹ director and other reasons our Orchestra was rather short-lived, but the Glee Club continued to exist.

Miss E. E. Baker and Dr. G. W. Bouldin, in the early days, were ardent sponsors of the club. And year by year the organization has been on the road to prominence until it enjoys the place it has today.

(編註 この記事は学院創立二十周年を記念して作られた英字新聞より抜萃したものである。)

¹⁰ 原文のママ : participated ?

¹¹ 原文のママ : talented ?

停滞状態

<昭和十二年>

主力の抜けた後のグリークラブは惨めなものであった。前述の北川治男、又、浅原俊輔等の優秀なるテナーが抜け普段でもトップ・テナー不足をかこっていたのが、二人も抜けては活動の弱まってくるのは当然であった。

このため無理をして演奏会を開くならばこれまでの伝統に傷をつけかねない状態だったので、第四回定期演奏会を開くことは中止となった。又、委員の活動があまり活発でなかったのも定期演奏会を開けなかった一因でもあった。

だがグリーメンはこれくらいのことで挫けはしなかった。来年の定期演奏会を期して、新部員の獲得と、より一層の練習に励んだ。その甲斐あってか多くの有望なる新人部員が集まった。彼等を鍛えれば来年度の定期には十分にやれる自信が湧いて来た。

戦線にいてこの年右手負傷した先輩伊藤武雄氏の記事を新聞は次のように伝えている。

戦線の音楽家二勇士

ピアノは弾けねど元気に唱はん

右手を失った伊藤武雄氏と友の身を案ず鈴木聰氏

東京音楽学校の同窓で結婚式まで一緒にした親友の二人の音楽家が同じ部隊の伍長として共に出征しながら今は野戦病院と第一線とに別れ別れになって互に身を案じあっている。傷ついたのは東京音楽学校助教授バリトンの伊藤武雄氏、第一線で親友の身を案じるのは新交響楽団のセリスト¹²鈴木聰氏、二入共〇〇部隊長木部隊の伍長で先月上陸以来これこそ軍歌「軍友」の歌詞の通り「着いた手紙も見せ合うて」苦労を分かっていた二人が、同じ〇〇部隊に入ることになったのも偶然ではなく鈴木伍長の切なる願い、隊長との好意によったものであった。

音楽家の二人はともすれば音楽の話をしがちになるが鈴木伍長は「俺達は伍長であって音楽家ではない」音楽的気持や話題は一切やめようと強い意志の力でただ伍長としての勤務にはげんだ。しかし二人はやはり音楽家だった。丁度上陸の夜〇〇附近の音楽学校に野営したとき、ボツンポシンとなれない手でピアノを叩くのが聞えた。「おい鈴木これが最後かもしれないから今夜は久し振りにピアノを引こうか。」こういったのは伊藤伍長であった。秋気は澄みきってショパンの美しいメロディでも心ゆく迄ひいてみたいようであったがいや止めよう、今は戦争だ、現在はピアノを叩く所ではない。俺達は伍長なんだと。」と鈴木伍長の一言に二人はピアノのキーにもふれないで野営の夢を結べた。

それ以来の激戦にも二人は共に大奮戦して戦い終ると「今日も生きられたね。」と手を握りあって喜んだのだ。ところが去る十四日〇〇攻撃伝令の伊藤伍長は激戦のうちに部隊長に報告、右手に敵弾を受けてしまった。戦い終って仮繃帯のまゝに後方に後る伊藤伍長は左手で親友鈴木伍長の手をしっかりと握り「俺の右手はもう駄目だ、君はこれから二人分働いてくれよ」と声うるませて頼んだのだ。その夜〇〇の野戦病院で伊藤氏は右手を手首から切断し、目下野戦病院で療養中だ。記者は二十日〇〇部隊の第一線に二人とも元気であれかしと祈りつゝ音楽家伍長を見舞ったが壕の中であったのは一人淋し

¹² 原文のまま：

く食事する鈴木伍長のみであった。「伊藤は可哀そうに右手を切ったそうです。もうピアノはひけなくなりましたよ。」と元気な鈴木伍長の顔が曇る。話題をかえて音楽家の耳でキャッチした戦場の感想を聞くと、私は応召以来音楽家ではないのです。

今は全然音に対してはつんぼになって音楽の事は考えません。戦地に於ける生活を最も幸甚にし、又最も忠実に果す為には意志の力で後を振り返らぬのが一番だと考えているのです。私がフランスで師事したコンセル・コロヌ首席セロ奏者ロペス先生は大戦当時四年間従軍した人ですが、先生が『戦争は音楽家をつんぼにする。』といった言葉がしみじみ判るような気がします。欧州戦争には欧州の有名な音楽家はほとんど出征し、フランスのラヴェル、コルト、ティボウ、独ではブッシュオー、オーストリアではクライスラー、ローゼンストック（目下來朝中）等はいずれも戦場の音楽家でした。大戦後では手がなかつたり足がなかつたりの音楽家が聴衆の拍手を浴びたそうです。手を失った伊藤君もきっと絶讃をあびると信じていますよ。」と語った。第一線を辞する記者は伊藤氏家に戦線に送られた手紙数通をかかえて野戦病院に伊藤氏を訪れた。右手をつむ伊藤伍長は案外元気に「手を切り落した日にはさっぱりしたと思いましたが、日がたつにつれて廃兵意識が勉くなり¹³、もうピアノがひけません音楽学校の万は辞表を出す積りですが、歌は歌えますが今迄よりももっともって元気に歌いますよ。」と力強いバリトンで語った。

<昭和十三年>

先年学院の教師をやめ、朝鮮に渡られた徳永先生の抜けた穴は（ここ数年間先生に指導をして頂いていたので）非常に大きかった。だが先生の長年の教えを忠実に守り、個人的に音楽の勉強をしていくならば充分やりおおせる自信は皆持っていた。こうした期待と不安の中に第四回定期演奏会は開かれた。その模様を七月五日付の九州日報はこう伝えている。

西南演奏会

昨日夕本社ホールで

昭和一三年第四回定期演奏会九日午後七時半より福博の楽壇に重きをなしている西南学院音楽部主催本社後援の第四回定期演奏会は九日午後七時半より本社ホールではなばなく開催定刻前より聴衆殺到し、夏の夕べに音楽的情緒を漂わせ午後十時盛況裡に閉会した。

この当時に於てはだんだん戦争も活発になり、音楽は軟弱なものとして軍当局からは決して快くは思われていなかった、又世間一般もあまり歓迎している風ではなかった。だが音楽愛好家は少くはなかった。こういう種々の状況の下に於て行われた演奏会ではあったが、真に音楽を愛好する人々が集っていたので、演奏の点に於ては未熟な点もあったが、誠に気持のよい演奏会ではあった。

¹³ 原文のまま

充実時代

<昭和十四年>

この年の世界の状勢をみれば、ドイツがポーランドに進駐しこれを占領。それに脅威感じた英仏両国は、ついに対独宣戦を布告したのであった。そのため欧州は再び動乱の渦に巻き込まれることになった。

一方、日本に眼を転ずれば、中国大陸を我が国の配下にして、一層国力の増強を遂げんがために大陸に於いて激戦を繰り広げていた。

世界大戦に入るのは時の問題とされていた。国民皆兵、男子二十才にして兵役を受くる——グリーの光輩も例外でなく、数多くの先輩が戦地へとおもむいていった。この戦争に於いて数多くの先輩が戦死したことは、戦争の常とはいいながらもやはり痛ましき出来事であった。

当今の世相と逆行したような歩みをしているかにみえるグリーは、だが国民の緊張した雰囲気の中に何か一服の清涼剤の役目を果しているといった演奏活動振りであった。こういう状況の下に第五定期演奏会は開かれた。日頃から交流のあった西南女学院の音楽部を賛助出演に迎えた。上級生はいわずもがな、中堅に優秀なる人材を豊富に擁してである故、十分に期待できることだった。

戦友に贈る

伊藤 武雄

私が大場鎮功撃の戦闘で負傷してから丸三年を越してしまいました。右手を失ったものの、戦闘に参加したのは僅か一ヶ月足らずでその長い転戦を重ねて苦労している人々に濟まないと思います。たとえ僅かでも実戦の体験を持っている私が、事変に直接的の関係を全然持たずにのほほんとしている人間と同じだとは思いませんが、とに角内地殊に東京のせわしない生活にもまれておりますと口でこそ何だかだと云っても皆様の御苦労を忘れ勝ちです。

私が白衣を着て東京に帰った頃は、万事がもっと派手でノンビリしていました。健康そうな若人が何の屈託もなさそうに歩いているのをみるとホロ苦いものが湧き出て来るのをどうしようもない気持でした。それでも段々馴れっこになると大して気にもならず自分もそんな連中と同じような顔をして歩いているに違いありません。もっともノンビリ歩くといっても最近では乗物が不便で一寸出歩くのも容易でなくなりました。省線電車もバスも市電も殺人的な混み方をしています。ガツガツした気特にならざるを得ないような有様です。こんなに人間ばかり多くてどうなるのかと思う事が度々あります。それでいてある方面には人手がなくて困り抜いているんですから、日本という世帯が如何に急激な膨脹をしているかが察せられます。横道にはいりましたが、都会人の困難に対する呑気さも、大部変って来たように思います。いわゆる娯楽という娯楽は享樂的要素の多く見えるものから削りとられていきます。私の商売は音楽ですが、こっちの方も「ハー小唄」や流行歌のようなものは次第に影をひそめて来ます。高踏的な音楽も国体にそわぬような色彩のものは遠慮せねばならなくなりつゝあります。

「一体流行歌のどこがいけないか」というような理屈はどう筋道をたてて説いても、鉄のような時の

流れに向っては螻蛄の斧です。明治の初め頃、チョンマゲをどうしても切らなかつたり、文明の利器をあくまで紅毛碧眼の魔術として排撃した人々があるかと思えば、反対に何から何まで西洋崇拜のこりかたまりが多たつたりしたように、今は生活の暗さを自分の気に食わぬことを罵倒することによってまぎらわせるといった風が流れています。しかし極く最近では口の上手い人間が許される範囲で云いたいことを云い尽くして了つたようにも見受けられます。

これからは力をもった実行の登場すべき時です。「治に居て乱を忘れず」とか「文弱に流れず」とかいったような古人の言葉を寝言の如く感じた時代もあったのに、世が変れば人の心も変るものです。そうした言葉が新しい内容をもって真実味をもってしみじみ感じられるような気がします。いわば近年の若人は貧乏でこそあれ坊ちゃんでありすぎる訳です。今のドイツを担っている人々の過去を見れば成程あれでこそと思える点があるではありませんか。現在の産みの苦痛必ず頼もしい若人を造り出すと思えます。娯楽の問題にしても「何かほしい」という一般の真剣な欲求が起きる迄享樂的分子をとりあげられてみるのもいいと思います。国民歌とか愛国歌とかの其に優れたものはもっとつきつめた欲求が起きないことには出現しないと断言出来ます。こうした問題に対して要路の指導原理は零に近いのですがこれは致し方ないことであつたと思えます。

私はたゞ自分の分野のことを例に挙げましたが、これは凡ゆる問題に適應することだと思えます、私は負傷したことによって多少の名をうりました。その為になお感じるのかも知れませんが、生き残る運命にあるのだつたらもっとも真剣な苦勞をしてみるべきだと感じています。音楽などやるのに何の苦勞もあるまいと思われる方もありましようが、芸というのも結局その人の発ですから凡人が凡人の域を脱するためには深い苦勞を経なければなりません。

考え方によってはよく戦つた人々の中からのみ次の時代を動かす力が産れるとも言えましよう。戦つというものはいくら見物に行つても自分か一兵士として弾丸の下に立ってみなくては分るものではない。皇軍兵士として死を決して働いてみて初めて分るものだと思います。

皆様私は皆様が内地のことについて色々の風説を聞かされて心配されるだろうと察します。そのように私達も又皆さんのことをよくは知ることが出来ないのです。たゞお互に与えられた立場において誠心誠意働くべきでありましよう。

今私はこの稿を書き乍ら皆様の御苦勞がしみじみと考えられるような気がします。大した働きもせず負傷したために生き残つている私は、たゞ首をたれてシッカリお願いします、といい得るだけであります。

皆様の御健康と立派なお働きのために祈つております。＝（現文のまま）＝（編註新聞掲載記事より抜萃）

（筆者は昭和二年旧制高等学部文科卒、グリーOB、新潟大学・桐朋学園教授、声楽家）

ライラックの創立

当時のグリーの指揮者だつた松本省一氏（現福岡電気ホール勤務）はアマチュアの混声合唱団を計画した。昭和十四年のことである。まず二十人くらいの男女が参加した。正式な創立は同年十二月、福岡ゲミッシュテン・コールと名づけた。そうして翌年一月にはライラック合唱団とあらためてラジオ放送

などで活躍、十六年五月にその第一回演奏会を福岡市の仏教青年会館で開いた。団員は六十人くらいにふくれあがっていた。男声はほとんど西南グリークラブのメンバーだった。指揮は氏がみずからやった。小柄ながら、どこかシューベルトに似た風貌の彼は、『シューベルトが指揮している』なんて言われた。福岡の人は混声合唱の美しさに魅了された。たいへんな歓迎であった。しかし、ときは支那事変がいよいよ長期化、ドロ沼の戦いとなる様相をみせていたころだ。西南学院には市民からの投書も相ついだ。『重大なる時局のおりにもかかわらず、毎夜、若き男女が相つどい、歌を歌うとは……』といった投書だ。そしてその“首謀者”松本氏は西南の学生だから注意しろというわけだ。このライラック合唱団は戦時中、英語追放で福岡合唱団と称していたが、ふたたび戦後はライラックにもどり、現在も松本氏の指揮で定期演奏会をつづけている。（編註 西日本洋楽物語より抜萃）

「自由の歌」

鶴原太郎

当時日本の作家による新曲というものはなく、少なくとも男声合唱に関する限りなく、ドイツのリーダー・シャッツとかアメリカのタウンナーのものの中から比較的唱い易いものを拾い出して唱っていた。この中の一つに“Freue Kunst”があり、現在「自由の歌」として歌われているものであるが、当時のグリーでは「詩林の賦」として歌われていた。そのうち津川主一氏の男声合唱曲集や、市販はされなかったが同志社OBだった水谷央氏の「若人の歌」という曲集が出たのだった。その「若人の歌」の中にあって当時から唱われて来たのが「新しき歌をエホバに向いて唱え」である。このように数少ない楽譜の中から選出して唱ったもので、外人宣教師が持って来たものも少なくなかったというのもうなづける。

当時の演奏会場としては、市記念館と現在の西南学院高校の講堂が主に使用され、入場者は大抵五十名程度だったのが、元九州日報ホール（現天神東映）を使用して満員の聴衆を集めたこともあった。スクールカラーのダーク・グリー¹⁴は既にこの頃からグリーによって用いられていた。

（筆者は昭和十四年旧制高等学部文科卒・グリーOB・KBCラジオ制作課勤務）

（当時のOBの思い出の曲）【四十周年記念ステージプロより】

ふるさと

松本省一

昭和十二年頃といえば日支事変。戦局は政府の不拡大方針とはうらはらに、次第に拡大されてきました。

こんな時の学院は米人教授が在籍しているということで、官憲の日がうるさいものでした。こういう状態の中でも私共グリークラブはのびのびと甚だ愉快地に学院生活を送りました。

¹⁴原文のまま：グリーン？

併し御多聞にもれず楽譜には非常に困りました。学院創立者C・K・ドージャー先生の御子息E・B・ドージャー先生の御所有のもの、特にニグロ霊歌などまるで宝物の様に拝借したものでした。

その当時、学生の中には全く勇ましいのがいて、“君はなかなか良いバスだから是非グリーに入って歌わんか” そうそう、新学期新部員勧誘の時期でした。“いや、俺はナニワブシ部を作るんだ” といって入ろうとしない。どう考えてもおいしいバスなので、その学生とコンクラベで入部を誘い遂にグリーに獲得しました。ところが、それからというもの全くコーラスに魅せられて、授業はさぼっても(?) 練習だけはキチンと顔を出すという模範部員です。私の卒業後その後輩が私のあとを指揮してくれました。

昭和十四年、平野先輩を始め、柔道六段の猛者、山中君らと共にライラック合唱団というアマチュア合唱団を創りました。男声部はオール西南でした。今年、創立二十年という記念年を迎えています。

今日この懐かしいステージに歌われます“ふるさと”はオリオンコール編曲のもので、この楽譜が手に入った時の喜びはそれは大変なものでした。皆が実によく愛唱しました。

西南グリーも終戦の虚脱状態からいち早く再興し、今日、益々隆盛に趣いていることを私共は心からうれしく存じます。

今後共大いに歌って下さることを切望して止みません。

(筆者は昭和十六年旧制高等学部商科卒・グリーOB・電気ホール勤務)(当時のOBの思い出の曲)【四十周年記念ステージプロより】

充実時代

<昭和十五年>

蘆溝橋¹⁵事件(一九三七・七)に端を発した日支事変は、既に四年目を迎え、戦線は中国大陸全土にわたって繰り広げられていた。明治政府の富国強兵策によって、急テンポに発展してきた帝国主義経済は、ごく限られた狭い国内ではまかないきれず、また経済伸長に欠くことの出来ない天然資源を海外諸国に求めざるを得なかった。そこで、財閥は軍部と結びつき、満洲に傀儡政府を設け、これを拠点として中国に日本の勢力を伸ばし、これを支配下に置こうとして蒋介石政府と衝突し、戦争が始まったのである。

また一方では、南進政策をとり、米、英、仏、蘭の支配する植民地にもその触手を伸ばし、これらの諸国との関係も次第に険悪化していった。一方、ヨーロッパ大陸では、ナチスに率いられたドイツは、着々と軍備を強化して、第一次大戦で失った領土や利権を回復しようとして、英仏等の資本主義国家と、ポーランド侵入によって遂に戦端を開き、ヨーロッパ全土にわたって戦線を繰り広げ、ドイツの誇る機械化部隊の活躍によって連戦連勝を重ね、ほとんどヨーロッパ全土を支配下に収めてしまうかの勢いであった。

国内に目を転ざると、昭和十三年に国家総動員法が可決され、思想取締りが強化されて、国民の自由は制限を受け、国全体は戦争一色に塗りつぶされていた。また、この年は皇紀二千六百年にあたり、戦意高揚も兼ねて、日本国中に盛大な祝賀式典が繰り広げられた。が、これも今となつては、帝国主義国家としての日本の最後の栄華であったわけである。

¹⁵原文のまま：現在は蘆溝橋？

音楽活動の面に目を向けると、演奏会の開催にも制限を受け、曲目も検閲を受けなければならなかった。二千六百年祝賀式典は福岡に於ても開催された。これには陸軍病院の白衣勇士達が招待され、レコード会社の専属歌手、楽団と共に西南学院音楽部も参加し、若人へのあふれる若さを十分に発揮し、聴衆に多大の感銘を与えたと当時の新聞は報じている。福岡に於ける西南学院グリークラブは、中心的存在であり、他にも市内には、前述したライラック合唱団や九大コーロステルラ、あかつき合唱団等があったが、グリーは合唱活動の中心をなしていた。

第六回定期演奏会は、松本省一氏の指揮の下に、十一月二十三日、福岡市記念館に於いて開催され、盛況の中に無事終了した。この定期演奏会の終了した後日、九州学生音楽連盟結成の話が出て、九大、九州医専、九州歯専、西南学院、福岡高商、明治専門、久留米高工の各部長や学生委員が集まり連盟が結成されて、第一回の行事として、歳末厚生週間に協賛し慈善大音楽会を開催しその収益を歳末厚生週間義金として寄附した。

ここでこの当時の微笑ましきエピソードを一つ。この頃のグリークラブと柔道部は何となくうまが合うのか、仲良くつきあっていた。それ故、柔道部からも数人くらいグリークラブに来ていた。その関係から、演奏会当日の入場料徴収、場内整理等を柔道部に任せていた。はっきりとは判らないので〇〇演奏会としておこう。

当日、演奏も順調に進んで行き、演奏もまずまずの出来であった。演奏会も半ばに達した頃、どう音をとちがえたのか、歌い出したら全然ハーモニーしていない。今更途中で中止する訳にもいかない。指揮者、部員共に困っていると、いつもグリーの演奏会を聞いていて、ハーモニーしているか否かくらい大体わかる程に耳がこえていた場内整理の柔道部員が、すわ一大事と後の方で椅子をタンとやらかせた。その途端、指揮者が後を振り向き、「静かにして下さい」とのたもうた。再び音を取り直して始めた。今度はきれいにハーモニーされていた。

戦時下の活躍

<昭和十六年>

アジア、ヨーロッパ大陸に拡がった戦いは、ますますその激しさを加えていった。中立宣言をしていたアメリカ合衆国は、ナチスのファシヨ政権を倒さなければ世界人類に平和と幸福をもたらすことは出来ない、という理由の下に、連合国側に武器援助を始めた。

日本では、前年、日独伊三国軍事同盟を結び、国民の眼を大陸より転ぜしめ、更に南進政策を策したが、これは、東南アジア地域に利害関係を有する、米、英、蘭その他の諸国との間に決定的争点を含んでいた。そして日本は戦争遂行に欠くことの出来ない石油資源を確保しようとして、インドネシアの石油を輸入しようと、オランダと交渉を行なっていたが、結局失敗に終り、武力によって確保する以外に手はないとして作戦行動を開始した。また、アメリカ政府は、悪化しつつあった対日国交調整を企図し、いろいろと努力したが、日本軍部の無理押しは、平和交渉による解決の端緒を自ら断ち切って、平和への道を閉ざしてしまった。そして運命の日十二月八日未明、日本機動部隊は無警告に真珠湾に攻撃を行ない、米英両軍に対し宣戦布告をなし大規模な作戦行動を展開して先制攻撃をなした。これによって世

界中は二大陣営に分かれ、ヨーロッパ大陸に、太平洋にと戦線を一層拡大して、地球上は戦禍のルッポと化した。

一方、国内に於いては、東条英機を首班とする軍部内閣が組織されて、戦争遂行に全力をあげていた。“戦意高揚”“欲しがりません勝つまでは”“米英撃滅”といったスローガンの下で、国民生活は極度に不自由さを余儀なくされた。

音楽活動の場合では、演奏会開催の許可を受けるのがなかなかうるさく、上演曲目では敵性国のものは一切駄目で許可されなかった。上演曲目申請の際、次のような笑えぬエピソードがある。それは、ベートーヴェンとは阿処の国の人間かとか、或いはニグロはアフリカの土人のことで、彼等の歌だといって申請すれば、アフリカ土人の歌なら害がなくてよいだろうとのことで許可になったりした。

以前もそうであったが、曲目を選ぶ場合、楽譜の入手が困難で、宣教師の先生方や他の合唱団から借り受けたり、譲り受けたり、或いは店頭で求める以外には手がなかった。他の合唱団から借りたりすることは、ほとんどなく、店頭で求める場合も欲しいものは数が少なかった。このような困難の下でも、めげずにグリーは活躍を続けた。定期演奏会、歳末厚生週間慈善音楽会、他の合唱団の演奏会の賛助出演等と。

笹森教授の功績

<昭和十七年>

日本軍の先制攻撃は功を奏し、連勝に連勝を続け、米英に大打撃を与えたかにみえた。しかし、天然資源に恵まれ、経済地盤がしっかりしているアメリカの軍事物資生産への切り換えが完了し、生産が軌道にのるにつれて、アメリカは立ち直り、広範囲にわたって反撃に転じてきた。即ち、ミッドウェー海戦に於いて日本海軍の誇る主力艦隊に致命的大打撃を与え、守勢から逆に攻勢に転じてきた。そして豊富な物量を役入りし、広範囲にわたる作戦を繰り上げ、日本は守勢にと所を変え、後退を余儀なくされた。しかし、日本の大本営本部は国民に対して、日本軍は快調に進撃を続け、敵に大打撃を与えた等と虚偽の宣伝をなし、戦局の推移にうすうす感づいている国民に対し言論の抑圧によっておさえていた。

学生達は、この戦争に対して多くは仕方がないといった気持があり、出来れば戦場へかりだされたくないものだとの考えを抱いていた。中には、この戦争には是が非でも勝たねばならぬ気負った気持ちで学業を半端にして、自から志願して戦線へと出征して行った者もいた。が、多くの学生は、この戦争について真面目に考えることはあっても、それを口にすることなく、いずれは戦線へかり出されるのだし、それまでは限られた範囲の中で学生生活をエンジョイしようとした。が、それも軍事教練がいよいよ激しくかつ厳しくなり、配属将校による文化活動への干渉は強まった。

特に、音楽等は男子たるものがやるにはあまりにも軟弱すぎるといった気持が一般にあった。従ってグリーに対する圧迫、干渉は配属将校によるものが特に強く、しばしば教授会に於いて、このことが議題に上がり、配属将校の主張によって、教授会の意見も解散させることに大勢が傾いてきたし、又、学校側としても時局柄、配属将校の意見に反対し、これを退ける訳にもゆかず、痛し搔しの有様で、学院に大きな貢献を果しているグリーに解散令を出さざるを得ない状態に追い込まれたが、この当時のグリーの部長であった笹森四郎教授（現関西学院大学）は、かかる時代に於ける音楽の重要性や、音楽の人間にもたらす影響等を主張され、この意見に強く反対された。その結果、グリーは命脈を保ち活動を続

けた。こうした状況の下に於けるグリーンに対する笹森教授の功績は大であるといわねばならない。

グリーンメンの中には、航空要員がいて、航空要員には耳がよいということが必須条件であり、日頃耳を訓練するためには、音楽をやるのが最善だとして配属将校等の干渉をしりぞけ、軍事教練や勤労奉仕の間に隙をみては練習に励んだ。

戦いはアメリカ軍を中心とする連合軍の攻勢によって敗退を余儀なくされていたが、陸軍の主力が中国大陸に釘づけにされ、反撃に出るためには兵力が不足しこれまで認められていた文科系学生の兵役延期が取り消され、卒業が半年繰り上げられて、学窓を巣立った学生達は学徒動員という名の下に戦線へと出征していった。グリーンメンも例外ではなく戦場へ駆り出されていった。彼等にとって日頃愛唱していた「U・B・O・J」や「行軍の歌」或いは「いくさ人」は戦線へ発つのにふさわしく、また戦場で転進する場合等、なぐさめともなり、また励ましともなった。

この年の定期演奏会（第八回）にまつわるエピソードとしては次のようなことがある。この演奏会によって得られた利益金で長崎へ演奏旅行を企て、そのために定期演奏会に要する一切の経費を節約し、会場も無料の学院講堂を使用。この利益と長崎会場である利益を宿泊費、旅費等に当てる計画であった。が、最後の許可を得るため長崎警察署へ行ったが、この非常時に学生に分際で有料の演奏会を開くとは何事かということで結局不許可になった。そのため今までの計画は一切が水泡に帰し、金が充分に余り、それを卒業生送別会の費用に当てた。そして当時、水茶屋にあった奉公館とかいう料亭で大いに騒いだ。そこのおかみさんが永年騒ぐ人達をみてきたが、貴方達みたいに騒いだ人達は初めてだと、おかみさんを驚かしたということだ。

戦前最後の演奏会……そして解散

<昭和十八年以後>

ミッドウェー海戦で敗れたことによって、制海権、制空権が逆転し始めた。更に、南方前線であるガダルカナル島でアメリカ、オーストラリア連合軍は反撃に転じた。そして、ソロモン海戦にも敗れた日本軍は、ガダルカナル島への補給がほとんど出来なくなり、部隊は大部分の戦力を失ってしまい、残存する少数がやっとのことで退却出来た。大本営はこれを転進と発表したが、国民はそれが惨敗であることを悟った。太平洋に於ける戦いの主導権は全く連合軍の手握られてしまい、日本は撤退を続け、戦線は次第に日本本土へと近づいて行った。中国大陸では、日本陸軍の主力が華北の中共解放区に攻撃の主力を注ぎ、一時は大打撃を与えたものの、中共軍と中国国民はこれにめげずに奮い立ち、この年の春から一層解放区を拡げ、夏には華北の八路軍と再建された華中の新四軍は完全に連絡し、全戦線にわたって遊撃戦を繰り拡げて日本軍を悩ました。

一方、ヨーロッパ大陸では、モスクワ、レニングラードの攻略に失敗したドイツ軍は、南部戦線にその主力を注ぎ、スターリングラードを包囲したが、この年の一月、ソ連軍は大反撃に出て、逆にドイツ軍三十万を全滅させた。この結果、ドイツ占領下の諸国のレジスタンス斗争は一層激しさを加えた。そして枢軸国の一翼イタリアでも共産党の指導の下に、レジスタンス運動は激しく、革命寸前の様相を呈していた。これにあわてた大資本家達は、パドリオ政府をつくり、ムッソリーニを逮捕して、ついに九

月には連合国に降伏をし、枢軸国の一角は崩れ去った。その後、連合国側の攻撃は更に激しく、戦線は枢軸国の退却によって狭まり、連合国の攻撃に耐えられなくなったドイツは、二十年五月に無条件降伏し、日本も、広島と長崎とに落とされた原爆によって事態が容易でないことを悟り、同年八月十五日、連合国側の要求をのみ、無条件降伏をし、地上は再び平和に戻った。

グリークラブは、こうしたあわただしい戦局の推移の中で、勤労奉仕や学徒動員の合い間に暇を見つけては練習に励み、活動を続けていた。そして、戦前、戦時中を通じて最後となった第九回定期演奏会は、七月十日、午後七時から学院講堂で開催された、この時の様子を当時の学院新聞は次のように報じている。

「湧き上がる兵士の合唱」「戦う学生音楽を誇示」

西日本新聞社後援による学院音楽部第九回定期演奏会は七月十日学院講堂に於いて開催された。音楽部長笹森教授の開会の辞に次いで国民儀礼あり。前線の勇士偲んで一同“海ゆかば”を斉唱、プログラムに入る。定刻前、既に堂に溢れた入場者の傾聴裡に、清新な曲目による合唱、マンドリン合奏、ピアノ独奏等多彩なる五線譜の律動が繰り展げられ、戦時下日本学生の文化を遺憾なく発揮した。演奏はまず、松隈君のタクトによるマンドリン合奏“東洋舞曲”に始まり、次いで井上君の指揮により、近來とみに内容充実し、澁らつ¹⁶たる声楽部の合唱あり、マンドリン四重奏男声四重唱と曲目は進められた。続いて水町院長以下諸教授、先輩諸氏よりなる合唱団の“昼の海”“野バラ”の美しい旋律には満場万雷の拍手を以て称讃を送り、西南女学院吉田女史のピアノ独奏、リストの“ハンガリア狂想曲第十一番”には聴衆一同唯肅然、鍵盤上を走る巧妙なる手の動きに全く魅了され、愈々今演奏会の華、声楽部全員によるグノーの歌劇“ファウストよりの抜萃「兵士の合唱」の力強い旋律は一同を興奮に巻き込み、暫しの拍手鳴り止まず、追加された曲目チェコスロバキヤ軍歌“戦線へ”には又も絶讃の拍手が送られ、斯くして十時近く非常なる好況裡に幕を閉じた。声楽部の「兵士の合唱」は素晴らしい出来栄であった。

この演奏会は、卒業生にとっては最後であっても、グリーにとって、戦後再開されるまで誰が最後の演奏会となることを予想したであろうか。演奏会が済むと、誰いうともなく、日頃練習していたピアノの周りに集まり、あれこれと歌い出し、最後に“兵士の合唱”を歌った。これが済むと卒業生達は互いに手を取り合って、涙を流しながら、いつの日にか再び“兵士の合唱”を歌いたいものだとかいろいろと語り合った。

この後、劇や演奏会等の上演は一切禁止され、グリーも演奏会を開くことが出来なくなり、グリーの活動はこの演奏会を最後に停止してしまった。

グリーからも、戦争が敗色濃くなるにつれ戦線へと召集され、再び帰ることの出来なかった人々が多くあり、霊やすらかなれと祈るばかりである。

¹⁶ 該当漢字がないので置き換え。

回 顧 録

内海 洋一

我々が専門学校の二年生の十二月に日本はハワイを爆撃し米国と戦争をすることとなりました。凡そ世間の空気はグリーのそれとそぐわぬものがありました。このため演奏会を開くにも其筋の許しを要し、交戦国の曲は演奏を控えねばならぬ有様でした。しかしグロススピリチュアルをアフリカの土人の歌という苦しい尽しい言訳をしたりして歌ったりはしました。其筋の関係者が今少しこの方面のことを知っていたら歌えなかったかも知れない場合もありました。当時のグリーの練習場は主として古いチャペルのグランドピアノの側でした。チャペルが駄目な時は、いま空地になっているところに建っていた西南学院教会を使用していました。我々が入学してグリー練習に出るようになった時、当時の指揮者の松本省一氏がまず云われたのは、「我々グリークラブの者は西南学院に入学したのではなく、西南楽院に入学したものと心得ること。このために講義はさぼっても練習には必ず出席すること。」でした。この考えは我々が二年生になり、グリーの責任をとることになっても変わらず、多分、現在も同様でしょう。

当時は男女の交際もうるさく、今日いうデイトのために練習をさぼることはあまり考えられませんでした。練習場は建物内であるので下駄履きが許されていなかったのも、下駄を手にもぶらさげ、はだして集まる者もちらほらあり、今日のグリーでは一寸と見られぬものかと思えます。我々が責任をとるようになり一番片勞したのは楽譜を手に入れることでした。川端にあった日本楽器の店に機会ある毎に出かけ、あさりましたが仲々みつきりませんでした。朝日の合唱コンクールの楽譜を申し込めば送ってくれるとの記事を見て、早速申し込み楽譜を求めました。シュルツ作曲の日本語の曲名「野路の夕」がそれでした。

当時は軍事教練じゃ、何じゃと体力を消耗するものがあり、練習の時には少々へばってからであるために、立ちづくめの練習が辛いこともありました。練習は試験直前と試験中を除き毎日五時過ぎまで通常していました。

五時になる修猷館のサイレンが大体下の音でブーとなるので、皆歌いやめ、アーと大声をそれに合わせて出したものでした。窓から外のグランドを見ると、野球やラグビーの連中が練習後の調整運動やランニングをしているのを見かけたりしました。それから又一しきり練習して帰るのが常でした。帰途はまた帰途でハモリながら帰る者もあり、グリーの奴は何時も歌っていると云われたものでした。当時の我々の行事予定に定期演奏会と、長崎へ演奏旅行することの二大行事がありました。あれこれ練習しているうちに、この二つのための準備をぼつぼつして行くことになりました。当時グリーの部長であった笹森先生に演奏曲目の相談をし、最後の曲をオペラ、ファウストの中の「兵士の合唱」をして見たいと意見を述べたら、「ウボイ」をやってはとのこと。私は「ウボイ」のことは同先生が持っておられた「関西学院グリークラブ四十周年記念誌」の中で、入手の由来やコンクールの第一回、二回、三回の時の自由曲に用いられたこと等が分かり、どんなものかを少々知り、かねがね入手したいと思っていました。しかし関学グリーの出身である笹森先生も楽譜はもっておられぬので、どうして入手しようかと頭を悩ました。当時ワグネル・ソサエティーが演奏旅行に来て、彼等が「ウボイ」の楽譜を持っているとのことで入手しようとしたがマネージャーがやらぬとのことで駄目でした。その頃、江口保之氏が西南

中学部の音楽教師として来られ、中学部のグリークラブの指導をしておられました。練習を我々がする前になされていました。或る日、練習場に行くとグランドピアノの上に楽譜があり、それにU・B・O・Jと書いてありました。これこれと早速中学生に一枚くれともらい、プリントがあまりよくなく不明な文字があるものでしたが、大急ぎですれとプリントをしました。戦後、長崎や福岡で関学のグリー時のものどちがい、楽譜もちがうところがあるのを知りました。

例えば、ユがコに、ベがバ等です。とにかくチェコ語が分かったものはいなかったのだから、適当にガリを切れでやったのでデタラメ文句となったのは当然です。

やっと部長の意向にも合う曲が入手され、しかも当時何かにつけマーチ風の曲を歌うことが多かった我々にとってこの曲を歌えるようになり、大いに気をよくして演奏会の最後をこれでかざることとなりました。当時の演奏会の入場料が五十銭でした。ジャムパン等が五銭で、それが現在十円ですから、当時の五十銭は今でなら百円となるので、物価の割合からいえば約二十年後の現在と大差ないこととなります。我々は長崎に演奏旅行するため、一切の経費を節約することにしました。このため例年記念館、現在の中央公民館ですのを学院のチャペルでし、合宿もやめ、宣伝費も節約しました。そして七月四日の夜七時から、あつい学院講堂に満員の客を迎え収入を多額にした次第でした。当時の演奏会には器楽部もステージをもっていた外に、女声合唱をライラック合唱団、当時は福岡合唱団にしてもらうことにし、更にピアノのソロまで入れていました。このピアノも金がかからぬことも考え、又、学院の音楽会という性格を出すためにも江口保之氏に頼んだものでした。当時のプログラムを見ると、ニグロ・スピリチュアルは黒人霊歌と書いて英語で演奏しています。又、「我国兵士」とやという時代色を現わすものもあります。その歌詞は「我国兵士の勇気を見よや、勇気を見よや、君主に報ずる忠義は高し。ヒマラヤ山の嶮岨も何ぞ、国家につくす勇気は深し。太平洋の風波も何ぞ、日の旗ささげて勇ましく、此の世輝す。」これならその筋は百パーセントO・Kです。ウボイは「戦線え」としてあり、これも時代色を充二分に出しています。

演奏会のステージの壁に国旗を右にペナントを左にはっていたのも時代の現われでしょう。長崎の演奏会のためマネージャーの山中孝彦氏と長崎に行き、方事O・Kとなり、ただ最後に警察に音楽会の許可をもらいに行くと、「この時局に学生の身分で音楽会とは何か。しかも有料では絶対に許さぬ」とのこと。少し入場料をとらぬと旅行が不能であったため、遂に涙をのんで旅行をあきらめました。このため得た金を三年生の送別会につぎこみ、水茶屋にあった大きな料亭で大きわざをし、女将を永年していた人に、「貴方達ほどよく歌い騒いだ人々は知らぬ」とおどろかせ、女中連が部屋に歌をききに集まることとなりました。送別会の楽しさを終え外に出ると、燈火管制の暗い街が我々をまっていました。それは我々卒業生の前途を暗示しているかのようで、何ともいえぬ複雑な気特になりました。これがこの世のコーラスのしおさめか、ともらす者もいました。グリーはチャペルの時に時々国民歌謡を全員に指導することもしていました。例えば「南方の歌」等です。「南の海のがやく緑、分けつつ一路西南指せば、まばゆき雲のわき上る彼方、虹の如波にうかぶ椰子しげる沃野」の如きものです。当時この歌を我々の指導の下におぼえ、南方の戦場に向かったものは多分この歌を口ずさみ、良き学院の学生生活を想起し故郷を想ったことと思います。私自身もフィリッピンやボルネオ等の岸を眺め船上で仲間にも教え、学院を、グリーを想起したものでした。きれいな緑色に黄色の五線と、バッヂの模様をあしらった当時の思い出のグリーのペナントは現在行方不明で残念ですが、当時の多くの思い出の歌の数々はメンバーに今日も残りつづけていると思います。勤労奉仕に、演習の帰途に、つかれた足を元気づけたグリーのコ

ーラスは当時の学院の全部の思い出の一つとして、あざやかに残っていることかも知れません。

(筆者は昭和十七年旧制高等学部文科卒・グリーOB・西南学院短大児童教育科教授)

親愛なるH君へ

梅北 正彦

グリークラブ時代の思い出——とくると、先ず何よりも、もはやはるかな昔のこととしか思えないのです。何しろもう二十年近くも経ってしまったのですからね。ところが、昨年秋から度々会っている現役の学生諸君から聞くと、グリークラブも四十周年を迎えるとのこと。何という長い間続いて来たものでしょう。その半分にも満たない僕の思い出が、はるか遠くだ、などととても云えませんね。

併し、あの大きな戦争を経験した僕達にとっては、戦争の前のことは、やはり何と云っても遠い昔のことになってしまいました。何しろ六、七十人もいたメンバーが、十四、五人になってしまっても、一応、毎週の練習時間にはどれだけかの人数が集まって、ジルヘルの「戦友」だとか、ウェルナーの「野バラ」等を歌ったものでした。

そして、昭和十八年の十二月には、第一回の学徒出陣というやつで兵隊に行かねばならなかった我々を差引くと、もう僅か六、七人しかメンバーとしては残らないという仕義に相成った時、おこがましくも当時指揮者であった僕は、君やもう一人のH君たち幹部に相談し、又、全員の意向をきいて、この際一時的にもグリーを解散した方がいいという結論に達しました。これは全く大変なことでしたが、輝かしいグリーの伝統がこれで断ち切られるものとは併し僕は思うておりませんでした。休暇で前線から、或いは兵営から帰郷して来られる先輩が数々おられましたし、やがて平和が来たら、或いは後輩の諸君が、またもう一度建て直してくれるだろうという気持はあったのです。当時の解散直前の写真を見る度に今でも暗い気持になります。あの写真に君がうつっていないのはどうしたことでしょう。多分、あまり健康でなかったために、君はお家で休んでおられたのでしょうか。何れにしろ君があの写真の中にいないということは淋しいことです。あの写真は多分、僕達が出て行く一週間くらい前にうつしたものだと思います。

僕は海軍へ、その他の諸君はそれぞれの任地へばらばらに散らばって行きました。激しい戦争でした。少尉に任官してから間もなく、僕は一度君の家を訪れたことをおぼえています。和やかな御家庭に一晚泊めていただいて、なつかしかったグリークラブ・ライブを二人で語り合いました。小さな演奏旅行がどんなに楽しかったか——。あまり福岡周辺の地理に詳しくなかった君や僕にとっては、一種の観光的興味もあって本当にたのしかったものでしたね。夏には唐津の方の何とかいう海岸で、グリーメン総勢で行った海水浴のことなど僕達の青春は全くグリーの生活で占められていました。海中の岩からはがして食べたアワビの味も、ウニのイガに注意しながら、ていねいに割って中の黄色い部分を食べた時の味も——そんなに思っていると、突然、二十年許りの余月を一挙にとびこして僕達の学生時代にあるような錯覚をおぼえさせましたね。当時は僕達の学生時代一挙国一致、一億総ケツ起の雰囲気満ちていた頃なので、今から考えると全くナンセンスなことが平気で行われていました。ライラック合唱団に行き歌ってもいい奴は学業成績が平均以上の者に限る、などというのもその一つでした。我々の先輩が

そのメンバーであったこの混声合唱に行き歌うということは、男女共学の経験のない僕達にとっては大変な魅力でしたからね。暗くなってから女性と一緒に歌を歌ったりして誠に不謹慎な、というわけだったのでしょう。様々の抵抗を意識しながらも、僕達は全くよく歌ったものでした。定期演奏会に備えての合宿などで、全員集まって共同生活をしたとき等は勿論、二人寄れば「汽軍チュウものは……」などとすぐ歌い、中洲から呉服町にかけてのメイン・ストリートを大勢でハモリながら、のし歩いたりしたのだが、今の学生諸君はどうでしょうかね。我々よりも、もっと紳士かも知れませんね。

そもそも僕等の時代は本当は歌を歌ってなんかおられた時代ではなかったのですが、それにしてもよくまあ歌ったものです。

勤労働員とやらで、稲刈りをしたり、軍事教練に忙しかった時代ですからね。それでも、映画等でヒットラー、ユーゲットの若者達が整然たる隊伍を組んで行進しながら歌うあの歌の美しさを見ながら、何時になったら日本人全部があんな風に音楽を身につけられるだろうかと思ったりしたものでした。夕陽を背に鋏をかついだドイツの少年達一人一人が、洗練された音楽的センスを持っていることを全く羨しく思ったものです。

戦争が済んで、先ず気になっていたグリーのことをそれとなくきいてみましたら、もう再び昔のようにメンバーが相集まり練習を開始していることを知り、早速、練習場に行ってみましたら、僕よりも先に帰っていた先輩の指導で、りっぱに歌っているのには驚きました。僕は終戦後、半年くらいたってから復員したので、グリーの復活の方が早かったわけです。まだメンバーの数も少なく、うまくもなかったのですが、こんなに早くグリーが再建されているとは夢にも思わなかったので、また一時解散の責任を感じていた僕には、本当にうれしく感じられました。

H君、最近のグリーの演奏会を聞いたことがありますか？僕達が歌っていた頃とは段違いにうまい演奏をしてくれています。いつか機会があったら是非きいてごらん下さい。君とは終戦後一、二度しか会っていませんね。そのうちまた会って、ゆっくりと話をしたいものです。ではお元気で。

(筆者は昭和十九年旧訓高等学部商科卒・グリーOB・RKB東京支社に勤務)

Lord, I want to be a christian¹⁷

内海 洋一

私か学院の二年生の十二月に日本はハワイを攻撃し、米国と戦争を始めました。このことで、凡そ当時の我々が置かれた社会情勢は何程か解って戴けるかと思えます。世は挙って戦争目的に向けられ、我々学生生活もその線に沿わせられた時代でした。当時のグリーメンの生活も現在のそれのように明るく、楽しく、希望に充ちたものであるべき筈でしたが、事實はそれと反対でした。将校になるべく学校の軍事教練で鍛われ、勤労奉仕のかけ声の下に戦没軍人の遺族や出征軍人の留守家族の農作業の手伝いに、又、山の家の開墾に時間と労力とを奉仕し、学校を出ると軍人となり、戦場に出て、或いは戦死というコースが考えられる生活でした。その作業に、又、軍事演習に疲れた身体を休める時に、我々数人が寄ると“Negro Spiritual”“ローレイ”“のぼら”“権兵衛とからず”等を歌い、家路につくときは重い足

¹⁷ 原文のまま Christian か？

をひきずりながらも“汽車ポッポ”“Der Soldat”“詩林の賦”“いくさ人”“ウ・ボイ”等をうたい、重い足を忘れ、近くにいる友人にもなぐさめを与え、帰途を短かく感じさせ、「グリーの連中はいいな」と云わせたものでした。暗い学生生活の中にさした一つの光がグリーのハーモニー・メロディーであったといえましょう。学生生活の中にしみ込み直結したコーラスの体験は意味が格別のものでありました。苦しみの中にあるが故に希望のかなた、神の国を求めて歌われた、**Negro Spirituals** が我々の心の歌となり、口からよく出たのも当然であったことかと思われまます。演奏会の曲目もその筋の許可を要し、プログラムには敵国の曲は許されないようでした。「ベートーベンとは何国人か、黒人霊歌とはどこの黒人か？」とたずねられ、「ベートーベンは独乙人で黒人はアフリカの有色人種だから敵性がなくてよかろう」といってやっと許される有様。当時のグリークラブ員の多くは航空部員でもありました。パイロットとしての耳をコーラスで養ったわけです。このため、今夜ステージに立つべき者が、沖縄で、フィリピンで、台湾の空で、尊い生命を散らしてしまう結果となりました。

思い出の曲のハーモニーの中に、共に声を合わせた、戦死した、一人一人のグリーの友の顔と声が思い出され、その死がおしまれてなりません。平和に迎えられた今日を心からよろこばしく思います。

(当時のグリーの思い出の曲)【四十周年記念ステージプロより】

いくさびと

井上 良助

我々の時代の政府、報道機関は敗戦への道を認めないような発表をしていて、戦意高揚とかで「欲がりません勝つまでは」とかいう文句が我々に押し付けられていました。グリーの先輩は学校の門から兵營の門へ直行し、我々の練習を見にきて励ましてくれる人もない時代でした。空襲を心配しながら演奏会も計画されました。それまでしても我々のコーラスを世に発表したかった、コーラスに対する我々の意欲は今考えると大したものであったと思います。その意欲により先輩が次々に築いた伝統の上に、終戦前の第九回の定期演奏会は無事盛大に開き、終ることが出来ました。その時の一番最後の曲はグノーのファウストの「兵士の合唱」で、ピアノの伴奏者は今夕指揮をされる福永氏でした。未だ白顔長身の中学生でした。このコーラスが我々卒業生にとっては一生の最後のコーラスであろうとは考えられましたが、グリーの最後とは考えられませんでした。演奏会が終ると誰いうとなく、日頃練習していたピアノの側に集まり、次々にあれこれと歌い出しました。やがてこれが最後のコーラスと「兵士の合唱」を歌いました。歌い終るや卒業生の間では手を取り合い、涙を流し、これが生涯の本当の最後のコーラスかも分からんなとか、また当時の「兵士の合唱」の歌詩に「永き戦い今やここにおさまりて、懐しき我が故郷に帰り来ぬ」というのがあり、そこで「我々もまた会ってこれが歌えたらなあ」という者も出て来て、悲愴な空気に充たされました。全員当時希望したように再会しコーラス出来るのを、当時を想いつつ、うれしく思う次第です。

なお、この「いくさびと」は元本学教授の故藤井泰一郎氏に訳詞を依頼して歌ったもので、現在、全国各地で歌われているのもこの訳詞である。(筆者は昭和十八年旧制高等学部商科卒・グリーOB・福岡銘木協同組合勤務)(当時のグリーの思い出の曲)【四十周年記念ステージプロより】